

平成25年度

大阪大学

文学研究科・文学部      インターンシップ報告書

教育支援室

## 目 次

はじめに……………教育支援室インターンシップ専門委員	片山 剛 (文学研究科教授)	1
1 音楽関係		
1.0 音楽関係インターンシップ概要 ……………	文学研究科教授 伊東 信宏	2
1.1 インターンシップ生を受け入れて … あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール支配人	吉元 晃	3
1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホールインターンシップ報告 … 文学部3回生 音楽学専修	田中 忍れ奈	4
1.3 京都コンサートホールインターンシップ報告 … 文学部3回生 音楽学専修	吉井 沙耶香	9
2 演劇関係		
2.0 演劇学演習「劇場制作演習」……………	文学研究科教授 永田 靖	16
2.1 兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター）インターンシップ報告 … 大学院文学研究科 修士課程	山本 知伽	17
2.2 ピッコロシアターインターンシップ報告 … …… 文学部3回生 演劇学専修	武宮 由佳	24
2.3 ピッコロシアターでのインターンについて … 文学部4回生 演劇学専修	橋場 あゆみ	30
2.4 兵庫県立ピッコロ劇場インターンシップ報告 … …… 文学部3回生 演劇学専修	橘 若菜	33
3 美術関係		
3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ ……………	文学研究科教授 藤岡 穰	42
3.1 「大阪市立美術館インターンシップで学んだこと」 … 大学院文学研究科 博士後期課程	藤本 真名美	44
4 映画関係		
4.0 2013年度インターンシップ概要 ……………	文学研究科教授 上倉 庸敬	45
4.1 インターンシップ報告書 ……………	文学部4回生 美学専修 大堀 知広	48
4.2 東映京都撮影所インターンシップ報告書 … 文学部4回生 哲学思想文化学専修	八巻 高之	50
4.3 13年度・東映京都撮影所インターンシップ・報告書 … …… 大学院文学研究科 博士前期課程	祖川 明子	54
4.4 東映京都撮影所・製作課インターン・体験レポート ……………	経済学部3回生 小林 寿樹	55



## はじめに

本報告書は、平成 25 年度に大阪大学大学院文学研究科および文学部において行われたインターンシップを含む授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加するという形で行われる、授業とは関係のない「インターンシップ」は、近年、増加の一途をたどっていると思われます。本報告書は、授業とは別に開講されるこうした企業主導のものではなく、あくまで文学研究科・文学部の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているインターンシップの報告をとりまとめたものです。

以下に、その実習先、人数、期間を概観しておきます。

### 音楽関係

○いずみホール	学部生 1 人	5 日間
○あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール	学部生 1 人	5 日間
○京都コンサートホール	学部生 1 人	5 日間

### 演劇関係

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）	大学院生 1 人	学部生 3 人	5 日間
--------------------------	----------	---------	------

### 美術関係

○大阪市立美術館	大学院生 1 人	10 ヶ月、1～2 週に 1 日程度
----------	----------	--------------------

### 映画関係

○東映京都撮影所	大学院生 1 人	学部生 3 人	2 週間～1 ヶ月
----------	----------	---------	-----------

平成 25 年度は音楽・演劇・美術・映画関係のインターンシップが実現し、参加した学生にとってかけがえのない体験であったことが、本報告書から十分に読み取ることができます。現在、実習先は芸術関係の諸施設に、また指導教員や学生も特定の専門分野・専修に限られています。インターンシップに対する取り組みは、本研究科・学部の中期目標・中期計画に明記されてきた事項でもあり、今後も着実に推進していく必要があると思われます。

最後に、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、積極的に学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の皆様、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

教育支援室インターンシップ専門委員 片山 剛(文学研究科教授)

# 1 音楽関係

## 1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

平成25年度の音楽に関係するインターンシップは、昨年に引き続きいずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、計3名の学生について実施された。これは、1学期、および2学期開講の「音楽学演習」受講生から希望者を募ったもので、3名はいずれも文学部 音楽学専修の3回生である。以下の学生からの報告は、受け入れ先のご意向を勘案し、昨年と同じくザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ掲載する。

その内容については、以下の報告に詳しいので、ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。

- ◆ 4月「音楽学演習」の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は3名が希望。その後、研修先を決定した。
- ◆ 11月18日、ザ・フェニックスホールの担当者谷本裕氏に、大阪大学豊中キャンパスに来学していただき事前研修を実施した。
- ◆ 10月7日（月）～10月11日（金）の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 10月29日～11月4日のなかの5日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 12月3日～7日（土）の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2014年1月7日（火）、3つのインターンシップについて、音楽学研究室の演習において、学生3名が報告。

平成25年度は筆者自身も文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業」の関係で、研究科主催の芸術祭の旗振り役を務めねばならなくなり、その一環として自身も演奏会を企画、実施する機会があった。そのような経験はこれまでもなくはなかったが、自分が責任者になって本格的にマネジメントに近い仕事をする、というのはやはり未知の経験であり、これまでこのインターンシップを各ホールにお願いしつつ考えていたことを改めて吟味する良い機会になった。実務経験者の話を聞いていると、音楽ホールや芸術関連施設の実務をとりまく環境は、本当に厳しいものがあり、これは研究者も他人事ではなくて、積極的に発言してゆかねばならない、と感じている。

そのような状況のなか、受け入れていただいたホールの方々には本当にお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

## 1.1 インターンシップ生を受け入れて

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール支配人 吉元 晃

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは2013年度、大阪大学の学生様をインターンシップ生としてお迎えしました。今回は、文学部音楽学専攻の田中あづれ奈さん。12月3日から7日の5日間、ホールにおいていただき、私たちホールの仕事の精神と実情を学んでもらいました。

研修内容は従来通り、コンサートホールの企画のあり方や広報、券売や貸し館業務など各種マネジメントの仕事。主に講義形式でお伝えし、また、公演パンフへのチラシの挟み込みなど簡単な作業も体験してもらいました。

ホール業務は多岐にわたっており、集中的な講義方式でその全容をお伝えするのは難しいものがございます。しかし普段、音楽学を学ばれている田中さんには、大学で学問として取り組んでおられる音楽が、「現場」でどのように扱われているか、少なくともその一端を感じていただく機会とできたのではないかと考えています。

最終日の7日は、ホールの主催公演「伊東信宏プロデュース ピアニスト金澤攝（をさむ）ヒストリカル・コンサート 『ショパンと親友たち』」の公演当日にあたるように日程を設定しました。当該公演は、大阪大学の伊東信宏先生にプロデュースをいただいたこともあり、学生の方には、例年よりも親しみを持っていただけたのではないのでしょうか。ゲネプロから開場・開演、終演、お客様やアーティストの送り出しまで、スタッフの動きを見ていただきました。

この、田中さんの報告文の最後の項に、私たちホールの自主事業に関する彼女の理解がまとめられています。損保の行うメセナ活動には、市中の商業公演（興行）とは異なる側面があります。芸術性・学術性・専門性といった、社会にとっては「新しい価値」を提示する側面です。こうした性格を持つ公演は、往々にして集客に苦勞することが多いのですが、それはホールの使命でもありません。一方で、収益性・大衆性・娯楽性といった、多くの方々に親しんでいただく公演を一定程度、打ち出すこともまた、事業の安定継続などを図る上で、現実には必要なことです。

こうした「異なる二つ」を併せ持つ点、その困難について、彼女は透徹した眼で把握してくれたんだな、と嬉しく思いました。彼女が体験した12月7日のヒストリカル・コンサートはとりわけ、前者の性格が強かったのですが、それについて音楽学を学ぶ若者としての感想も記されており、難澁しながら企画制作に携わった私たちとしては、感慨深いものがありました。若者らしい批判的な言説も、伺ってみたいと存じます。

同じ大学でも、理工系では産学協同といった呼び名で、民間企業と文字通りの協働作業、製品や事業の共同開発などが進んでいます。音楽をはじめとする芸術を扱う文系学部も今後、私たちのような音楽事業者との協働をさらに深めていただきたい。そして双方が相互に触発し、発展を遂げる契機となるような出会いを、これからも期待したいと考えております。インターンシップが、そうした出会いの一つとなることを祈ります。引き続き、宜しく御願いたします。

## 1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホールインターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部3回生 音楽学専修 田中 忍れ奈

### ■研修先

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

### ■研修期間

平成25年12月3日～7日

### ■事前研修（11月8日）

阪大音楽学研究室にて、ザ・フェニックスホール企画担当の谷本さんよりお話をうかがう。ホール概要、メセナの意義についての講義の後、この研修で特に学びたいことを訊かれ、メディアに対する広報活動と答える。

### ■研修内容

一日目

9:00 出社

9:15 【講義】ザ・フェニックスホールの概要 — ①

13:00 ホール職員紹介（全体朝礼）

13:15 ホール内案内 — ②

14:00 ホール機器説明 — ③

15:15 インフォメーション作業 — ④

17:00 退社

#### ① ホール概要

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホールは企業メセナの拠点として平成7年に設立された。運営管理はMS&AD ビジネスサポート株式会社に委託されており、レセプションや機械操作、ピアノ調律等は外部スタッフが担当。大阪駅のほど近くに立地し、関西一円を商圈に含む好条件の下、年間稼働率は平均180～190日と高い。客席数301～335の小規模なホールであり、クラシック音楽のリサイタルや室内楽のコンサートを中心に扱う。損保会社の収益を芸術振興活動に使うことについての議論もある中、関西の主要9ホールの中で差別化を図り、「選ばれるホール」となるための試行錯誤が続けられる。

#### ②ホール内案内、③ホール機器説明

あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワーのうち、ホール部分は3、4階にあたる。1

階エントランスに受付、2階にドリンクコーナー等を備えたホワイエがあり、各階をホール専用エレベーターが行き来する。舞台および1階客席は可動式。壁と天井の角度を操作し残響時間を調節することができる。舞台後方は一面がガラス張りで、開閉式の遮光壁を上げると御堂筋の眺望が広がるが、音響にやや影響するためアンコール時の演出にのみ使用されることが多い。

#### ④インフォメーション作業

出演者変更に伴い、催物案内に訂正のシール貼り。

#### 二日目

9:00 出社

9:10 【講義】機関紙「サロン」について — ①

10:20 【講義】著作権について — ②

13:00 【講義】自主企画事業、公演広報 — ③

17:00 退社

#### ①機関紙「サロン」について

年6回発行される、ホールの演奏会情報誌。友の会会員をはじめ、記者や近隣のホール、美術館、音楽大学等に配布される。デザインと印刷は外部委託だが、誌面構成、演奏者やライターとのやりとり、校正等はサロンチームのスタッフが行う。チケット発売日から逆算したシビアなスケジュールの下、個々の交渉相手に合わせたきめ細やかな対応が求められる。

#### ②著作権について

公演チラシや演奏曲目、朗読や芝居の脚本、演出に使用される映画などにかかる著作権を管理する。損保会社の運営ということもあり、特に気を遣う仕事である。自主公演の曲目についてはJASRACと包括契約を結んであり、事前に公演予定を申告しておく。演奏時間が5分経過する毎に1曲と数える「みなし曲数」が用いられるため、本番中はステージマネージャーがストップウォッチで時間を計っている。曲目の登録と演奏時間の申請はJASRACのホームページ上で行う。

#### ③自主企画事業、公演広報

2012年度の自主企画公演数は14回。不動産事業に近い貸館公演とは異なり、ホールのコンセプトを社会に示し独自性をアピールする役割を担う。ザ・フェニックスホールでは、新しい価値の発信（新人紹介コンサート、古楽的アプローチ、レクチャーコンサート etc.）と若い世代の教育（マスタープログラム、アウトリーチ活動、ファミリーコンサート etc.）を特に重視しており、“親密空間”、“空中劇場”といった構造上の特色が公演内容の個性を支えている。



挑戦的な公演で出た赤字は集客性の高い「定番」の演目で補う。常に大衆性と先鋭性のバランスが必要となる。

ホールが主体的に行う広報活動には、チラシやホームページ、新聞広告など不特定多数を対象とするものと、機関誌など特定の人達（＝会員）へ向けたものがある。一方、客観性の高い新聞記事は無料で高いPR効果が得られる広報の形である。社会的に信頼度の高いメディアの学術的価値と大衆的価値という二つの異なるものさしによる価値判断を突破すれば、お墨付きと見なされ公共性や話題性を得ることができる。記事にしてもらうためには、プレゼンテーション力とドキュメンテーション力を磨いて記者にアプローチするとともに、日頃から人脈を築いておくことが大切。

広報活動の基本は「どういう客を集めるか」を考えることであり、企画と広報とは不可分である。自主企画担当者は、専門性と大衆性を併せ持つ“縁側の存在”でなければならない。

### 三日目

9:00 出社

9:15 【講義】貸館公演の受付・インフォメーションの作成 — ①

10:30 【講義】友の会組織・運営について — ②

13:00 【講義】金澤公演概要説明 — ③

14:00 全体会議・チラシ挟み込み作業

17:00 退社

#### ①貸館公演の受付・インフォメーションの作成

貸館の依頼があった場合、複数のスタッフが主催者の資料を精査し、ホールのステータスに見合う公演内容かどうか判断する。小編成のクラシック音楽が中心で、アマチュアの場合は基本的に断る。年に数回はポップスのコンサートや会議・評議会などに使用されることもあるが、技術・質ともに一定の基準を満たす公演に限られ、販促に繋がるものや政治・宗教色を帯びるものは認めないなど、制約は多い。

#### ②友の会組織・運営について

友の会は入会金無料・年会費1000円。座席券割引、先行予約、『サロン』送付、提携飲食店等での割引といった特典を受けられる。会員は約1100名で、ほとんどが50～80代。若い世代の会員を増やすため、まずは損保会社社員をターゲットにオフィス周辺の提携店を開拓している。

#### ③金澤公演概要

伊東信宏プロデュース ピアニスト金澤攝（をさむ）ヒストリカル・コンサート  
「ショパンと親友たち」

大作曲家の“個性”と今日思われているものには、知られざる音楽家達の影響があったかもしれない。脱落しているピースを埋め、音楽史を問い直す金澤氏の活動の一例として、本公演ではショパンと周辺の作曲家に注目する。

#### 四日目

9:00 出社

9:10 【講義】貸館事業 — ①

11:00 【講義】ザ・フェニックスホールチケットセンター — ②

13:00 インフォメーション作業

#### ①貸館事業

主催者のほとんど（2013年度は87%）がリピーター。継続率を高める一方で、新しい顧客を獲得することも重要である。新規開拓のための取り組みとして、大阪アーティスト協会への営業やリハーサル室使用料割引キャンペーンなどを行う。貸館公演と自主公演はいわば車の両輪であり、貸館に特化したホールは質が低下するという説もある。

#### ②チケットセンター

利用者にとっては、プレイガイドと違い座席を選択できることがチケットセンターの利点。券面の作成には票券管理システムを使う。公演は満席が理想だが、招待用として確保しておいた席が当日空くことも多い。また、クレーム対応にも数席が取り置かれている。売り上げが減るリスクと突発的な事態に対応できないリスクのバランスの取り方が課題である。

電話や窓口で客と直接やりとりするチケットセンターでは、効率性よりも人間的な対応が優先される場面もある。“質の高い聴衆”との間に良好な関係を築くことで、ホール自体の価値を高めることができると考える。

#### 五日目

9:00 出社

ホール内準備、公演本番・終演後対応の実務実習 — ①

19:00 退社

#### ①実務実習

リハーサル見学、インフォメーション作業の後、開場準備以降の各部署の動きを見学。最小限の人員で現場を回すため、一人のスタッフが何役もこなす。企画・広報担当者はロビーを回り、関係者が来ていれればすかさず挨拶をする。終演後、お客様をお見送り。楽屋には面会希望の招待客の列ができる。

谷本さんのお話

リハーサルで、音響や演奏についての助言を演奏者から求められる場合もある。音楽的な相談にもすぐに答えられるよう、普段から様々な音楽を聴き、勉強しておかなければならない。演奏者の気質、キャリア、その日の様子、自分との距離感を勘案し、公演当日は演奏者が音楽に集中できるよう配慮して接する。ホールの企画担当とは、学芸員的な側面とサービス業の側面を併せ持つ仕事である。

#### ■研修を終えて

今回、複数の方々からお話をうかがう中で特に印象的だったのは、コミュニケーションの重要性が繰り返し強調されたことである。スタッフ間でも立場や意見は様々に異なる。時に主張がぶつかるが、「上下左右が議論して、中庸に戻るのが一番」という。収益性と芸術性、大衆性と専門性、娯楽性と学術性など、相反する価値観の間でバランスの取れたホール運営をするためには、ひとつの視点に凝り固まらない柔軟な組織であることが必要なのだろう。外部との交渉においても、積極的な意思疎通は豊かな人脈を生み、仕事のし易さや新たな機会をもたらす。ビジネスの機械化・効率化がいかに進もうとも、「貸し借り」や「気遣い」といったやりとりの根底にある人間臭さは変わらないのだと感じた。

ザ・フェニックスホールは、ホール構造の特殊性と個性的な自主企画公演により、関西の多くの音楽ホールの中でも大きな存在感を放っている。クラシック音楽の市場では客層の固定化と高齢化が進み、公演内容はマンネリに陥りがちであるように思う。そんな中、ザ・フェニックスホールが発信する「新しい価値」は、クラシック音楽をライブで聴く意義の再発見に繋がり、大規模なホールでは不可能な形でクラシック文化の存続に貢献しているのではないか。ホール運営については事務的な作業のイメージが先行していたが、文化の立役者となれるとても創造性の高い仕事なのだと知ることができた。

お忙しい中にも関わらず、私達インターンシップ生のためにたくさんの時間を割いてくださったザ・フェニックスホールの皆様に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### 1.3 京都コンサートホールインターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部3回生 音楽学専修 吉井 沙耶香

私は、2013年10月25日から29日の5日間、音楽学研究室を通してのインターンシップとして、京都コンサートホールにてさまざまな業務を体験させていただいた。

#### 【研修内容概略】

期間 2013年10月25日（金）～10月29日（火）

日程（いずれも8:30～17:15）

第一日目（10月25日）

- ① オリエンテーション
- ② 事業説明・施設見学
- ③ 業務マニュアルデータ作成

第二日目（10月26日）

- ① チケットカウンター業務
- ② レセプション業務

第三日目（10月27日）

- ① 舞台業務（大ホール、小ホール公演）
- ② グッズ販売業務

第四日目（10月28日）

- ① 各種書類データ作成
- ② チラシ挟み込み作業

第五日目（10月29日）

- ① ホームページ作成業務
- ② 自主事業企画について

#### 【施設概要】

25日、インターンシップ担当の前田さんより、ホールについての説明と、施設の案内をしていただいた。

京都コンサートホールは、平成7年に完成した京都最大級のクラシック専用コンサートホールである。平成18年からは指定管理者制度により、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が管理運営している。京都市交響楽団をフランチャイズ・オーケストラとしている。設計は磯崎新によるもので、風水の観点に基づく独自のスタイルをもっている。

#### ●コンサートホール（大ホール）

客席数1839席（うち車いす席6席）。シューボックス型。主としてオーケストラ演奏に使用

される。舞台後方にはパイプオルガンを設置。

●パイプオルガン

ドイツ、ヨハネス・クライス社製。西日本最大級のパイプオルガン。総ストップ数 90、パイプ総数 7155 本。尺八、篠笛、笙、箏の和楽器ストップ搭載。風水の観点から、あえて舞台後方中央ではなく、舞台後方右寄りに設置されている。

●アンサンブルホール ムラタ（小ホール）

客席数 514 席（うち車いす席 4 席）。室内楽や独奏、小編成のオーケストラの演奏に使用される。独特の六角形の空間は風水の考え方によるもの。

●エントランス

こちらも風水の観点に基づいて設計されている。中央部には十二支をイメージした十二本の円柱を配置。床には幾何学模様が描かれている。京都コンサートホール独特の螺旋状スロープは、聴衆を現実の世界から音楽的陶酔の世界へと誘う、という意味がある（一部のお客様からは、「ホールに着くまでが長すぎる」というクレームもある）。

【チケットカウンター業務】

26 日は、3 月 15 日に開催される「錦織健リサイタル 2014」のチケットが朝 10 時から販売開始のため、チケットカウンターで業務管理課の中村さんについてチケット出しを体験させていただいた。チケットカウンターにはレジが導入されており、会計や金銭管理などは効率的であると感じた。しかし、空席情報の管理は手作業で、窓口・電話・インターネットという複数の販売経路がある中では非効率であるように思った。空席情報を複数のカウンターで同時にリアルタイムで確認できるようなシステムの導入が望まれる。

【レセプション業務】

26 日の「京都府警察音楽隊 第 24 回定期演奏会」において、レセプション業務を体験させていただいた。まずはじめに、警察音楽隊の代表の方々と、前田さん、当演奏会のレセプションチーフの源田さん、サブチーフの中津さんとで行われる打ち合わせ（レセプション打ち合わせ）を見学した。その際に、レセプションのお二人が、チケット・配布物、施設の利用、途中入場のタイミングなど、細かい点の一つずつ丁寧に確認しておられたのが印象的だった。

実際の業務では、十数名ほどのスタッフがホール入口、ホワイエ、客席正面、各ドア前、クローク等のポジションにつき、各自がインカムをつけて情報を交換、共有し合いながらそれぞれの役割をこなしていた。開演前はプログラムの配布を体験し、お声かけをしながら複数のお客様（家族連れ等）にプログラムをもれなくお渡しすることが予想以上に難しく感じた。終演

後はクロークでお預かりしていた荷物の返却を体験し、素早く、かつ正確にお客様に荷物をお渡しすることを心がけたが、大きな荷物は少々手間取ってしまった。

演奏中には、源田さんに各ポジションを案内していただき、レセプションニストの仕事についてお話を伺うことができた。

(源田さんのお話)

●「レセプションニスト」という仕事について

基本的には、お客様を案内することと、扉を守る（＝演奏中のお客様の入場、それによる演奏の妨げを防ぐ）ことがレセプションニストの仕事。そのためには常に他のメンバーと連携を取り合って行動する必要がある。また、いつお客様に聞かれても答えられるように、ホール内のことはもちろん、事務所のこと（チケットブース等）やホール周辺のこともしっかり把握しておくてはならない。

●心がけていること

いかにお客様に喜んでもらえるか、ということを常に考え、気配りを忘れないように心掛けている。また、主催者側の意思をしっかりと理解し、主催者の指示したタイミングでお客様を案内することが大切。

レセプションニストの方々の働きや細やかな気配りによって、聴きにいらしたお客様と、演奏会の主催の方々両方が、心地よく演奏会の時間を過ごすことができるのだということを実感した。

【舞台業務】

27日の「チェコ・フィルハーモニー管弦楽団」（大ホール公演）と「京都フィルハーモニー室内合奏団 第190回定期公演」（小ホール公演）において、舞台業務を見学・体験させていただいた。京都コンサートホールは舞台業務を株式会社SMSに委託している。

SMS 舞台担当の宮村さんにお話を伺いながら、設営業務を手伝わせていただいた。まずはじめに椅子・譜面台出し、電動迫りの数値入力・操作を行った。その際、楽団の方から迫りの高さを最初の設定から変更するよう依頼があった。チェコ・フィルハーモニー管弦楽団はこの日が日本ツアーの初日で、まだ日本の空気に慣れておらず、ホールの感覚もつかめていなかったための変更だという。

その後、大ホールと小ホールの舞台袖を回って、ステージ上で使用されている舞台備品（椅子・譜面台、指揮台、平台、チェロ台等）の数を確認し、書類に記入する作業を行った。この作業では、ステージ上に出ている備品の数を数えるのではなく、舞台袖に残っている備品の数を数え、その数を総数から引く、という方法をとる。書類に記入する数字は各演奏会で使用する備品の総数であるが、曲目ごとに使用する楽器や備品が変わる場合もある（例えば、今回のチェコ・フィルの演奏会では、Ⅰ部：ドヴォルザーク チェロ協奏曲、Ⅱ部：ブラームス 交響

曲第1番だったため、Ⅰ部からⅡ部でチェロ台を片付ける必要があった)。そのため、曲ごとに必要な備品を正確に把握し、必要な時に素早く用意することが大切であると感じた。

また、舞台担当の方々が、出演者側の希望に応じて迫りや椅子の高さや位置を細かく調整したり、休憩中にセッティングを素早く変えたりしておられるのを見て、このような配慮があるからこそ演奏会は滞りなく進行し、出演者の方々も快適に演奏することができるのだと改めて思った。

### 【グッズ販売業務】

27日の午後は、大ホールホワイエにあるグッズ販売コーナーで、開演前、休憩中、終演後の3回、グッズ販売を手伝わせていただいた(本番中は大ホール客席でチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴かせていただけた)。京都コンサートホールは、ネクタイ、ポストカード、シール、クリアファイルなど、多岐にわたるオリジナルグッズを販売している(なおグッズ販売は京都コンサートホールの自主公演の際のみに行われる)。

販売方法は簡易的なもので、レジはなく、商品の販売個数や売り上げはすべて手動で管理する。お客様が一度に大勢いらっしゃった時などは販売個数があやふやになりがちになってしまい、実際に販売した品物の個数とレジの金額が合わなくなってしまうというアクシデントもあった。

ホールでの演奏そのものだけでなく、こういった販売サービスで演奏会を楽しんでいただくことも、ホール側としては非常に大切なことだと思った。

### ◆大ホール公演概要

公演名／「チェコ・フィルハーモニー管弦楽団」

プログラム／ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 口短調 op.104

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 op.68

指揮／イルジー・ビエロフラーヴェク(首席指揮者)

チェロ／ナレク・アフナジャリヤン

主催／京都コンサートホール(公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団)

### \*「チェコ・フィルハーモニー管弦楽団」所感

全体を通して、それぞれの楽器の音色がクリアに聴こえ、かつ調和のとれたハーモニーが美しい演奏であると感じた。特に、ダイナミクスの幅が非常に広く、ppの演奏もただ弱いのではなく、弱いながらもしっかりとホール全体に響いており、これが本当の意味でのppというものなのかと驚かされた。そしてクレッシェンドの際の迫りくる音の迫力は思わず目を見張るものがあった。日本ツアーの初日で、京都コンサートホールでの演奏はおろか日本の気候そのものにもまだ慣れていないにも関わらず、楽団員は自らの音色、ハーモニーの響かせ方を熟知し、空間の変化にもしっかりと対応しているようであり、楽団員一人一人、そして楽団全体のプロ

としての意識、レベルの高さを強く実感した。

私は1階席の前から4列目の席で聴いていたのだが、I部・ドヴォルザークのチェロ協奏曲ではチェロ独奏・アフナジャリヤン氏の息遣いが聞こえてきた。特にカデンツァの部分では、目を閉じ、音楽にのみ全神経を研ぎ澄まして没頭しており、凄まじい気迫と集中力が感じられた。プロの演奏家というものは、一般の人々が到達することのできない次元で音楽と向き合っているのだということを考えさせられた。力強さと繊細さの両方が色濃く感じられる素晴らしい独奏であった。

またI部II部共にアンコールが充実していた。I部ではアフナジャリヤン氏の弾き語り（チェロ演奏と歌）、II部では3曲のアンコールが用意されていた。II部のアンコールは1曲目はブラームスの「ハンガリー舞曲」、2曲目は「ソリマ」という高い演奏技術を要するクラシック曲、3曲目は「ふるさと」であり、日本の観客に馴染みの深い曲や超絶技巧で楽しんでもらおうとする楽団側の意向が感じられた。しかしII部のアンコール曲が多くプログラム全体が長くなってしまったことで、疲れてしまったお客様もいらっしやっただのではないかと思った。

#### 【演奏会、コンサートホールについて】

28日、事業企画課の福島さんから、演奏会、コンサートホールの歴史などについてのレクチャーを受けた。

#### ◆レクチャー概要

クラシック音楽が演奏される場所は、中世社会では宮廷・教会・貴族の私邸など、聴衆が限定される空間またはプライベートな空間のみであった。近世・近代以降はサロンや家庭における合奏の他に、ホールや劇場などの開かれた空間で不特定多数の聴衆をターゲットにした公開演奏会が開催されるようになった。

また、ベートーヴェンが活躍したころから、演奏会の入場料を先払いしておく「予約演奏会」や、あるコンサートホールお抱えの楽団による「定期演奏会」（楽団のファンをターゲットとする）が開催され、次第にコンサートホールを主体とする演奏会が行われるようになっていった。興行師と呼ばれる人々が出現し始めたのもこのころである。

さらに、クラシック音楽が演奏される空間がサロンや家庭などの狭い空間から、コンサートホールという広く大きな空間に移り変わったことにより、ホール全体に響き渡るような大きな音が鳴らせるように楽器の改良が行われ、より大きな声で歌えるような歌い方の研究がなされた。コンサートホールの存在は音楽のあり方や演奏そのものにも多大なる影響を及ぼした。

Classicの語源はclass（階級）であり、「クラシック音楽＝階級を持つ人々の音楽」「階級が違えば聴く音楽も違う」ということをよく表している。そのため、クラシック音楽のマーケットは一般に高学歴・高所得層が多いといわれる。但し、スポンサーはゴルフなどスポーツイベントに比べて著しく少ない。

そして現代においては、クラシックを消費する人々の中には、純粋なクラシック音楽のファ



ン層だけではなく、ブランド品を購入するような層（海外や一流楽団・音楽家の演奏を、高額なチケットを手に入れて聴く自分が、豊かな財産を持っていて教養のある人間だと感じ、そのような自分に酔っている人々）、感情移入、ストーリーに参加する層（フジ子＝ヘミング、辻井伸行など、障害をもちつつもその困難を乗り越えて活躍する、メディアに取り上げられたアーティストへの感情移入など）も多い。

自分にとっては、演奏会やコンサートホールは「あることが当たり前のもの」であったため、演奏会そのものの成り立ちや歴史についてはほとんど考えたことがなく、非常に興味深いレクチャーであった。特に、演奏会やコンサートホールの存在が、既存のクラシック音楽そのものに大きな影響を与えたという事実が非常に印象的であった。そして、クラシック音楽を嗜む人々の階級や教養、さらにはメディアの影響は、コンサートホールの経営やコンサートの企画を考えていく上で非常に重要なことであるということを実感した。また、実際の京都コンサートホールの経営状況についてももっと詳しくお話を伺うことができればよかったと感じている。

#### 【自主事業企画について】

29日には、事業企画課の和田さんに京都コンサートホールの自主事業についてお話を伺った。京都コンサートホールでは、京都の芸術文化の振興・発展を目的として、外部からの持ち込み事業（貸館事業）以外に、多様な自主事業を行っている。

京都コンサートホールの1年間（4月～3月）の自主事業のうち、半分以上が「京都の秋 音楽祭」が行われる9月～11月の間に集中している。この時期に特に注目の公演を固めている。

京都コンサートホールの自主事業を企画する上で事業企画課の方々が考慮している点は、まず、大ホールを使用する催物（オーケストラ等）と、小ホールを使用する催物（室内楽、アンサンブル、ピアノリサイタル等）をバランスよく振り分けること、さらに時代区分（バロックから現代音楽まで）、対象顧客（子供から大人、お年寄りの方まで）にも偏りがないように企画を行うことだそうだ。

また、京都コンサートホールではシリーズ物として行われている催物が3種類ある。

- ① 京都市交響楽団（京都コンサートホールのフランチャイズ・オーケストラ）のメンバーによる演奏会
  - ・京響メンバーによるブラスアンサンブルの夕べ Vol.9
  - ・泉原隆志ヴァイオリンリサイタル 等
- ② 平日お昼のコンサート 田隅靖子館長の“おんがくア・ラ・カルト♪”
- ③ パイプオルガン 年間5本シリーズ
  - ⇒舞台設備としての京都コンサートホールならではの武器
  - ・オムロン パイプオルガンコンサートシリーズ
  - ・京都コンサートホール クリスマスコンサート“オルガンの翼にのせて” 等

和田さんは次のように語ってくださった。

「自主事業というものは、いわばそのホールの品ぞろえであり、顔である。百貨店のよう、お客様が好むもの、興味をもっていただけるものを提供できるホールでありたい。そして、地方に根ざしたオリジナリティを持ちつつ、世界とダイレクトにつながる、そのようなホールを目指したい。」

京都コンサートホールの方々は、できるだけ多くのお客様に興味・関心をもってホールにご来場いただくために、お客様が見たい、聴きたいと思うような演奏会と、京都コンサートホールでしかできない演奏会その両方を企画・運営されている。京都コンサートホールの、来場されるお客様の立場に立ちつつ、自らの良さを活かそうとする姿勢が、京都の芸術文化の振興につながっていくのだと感じた。

### 【その他の業務】

・各種書類（業務マニュアル、京都コンサートホールホワイエ等利用許可申請書、領収書再発行申請書、駐車許可申請書、撮影許可申請書）のデータ化

京都コンサートホールでの手続きの際に使用される書類。紙媒体から Word または Excel でデータ化。

・チラシ挟み込み

演奏会のパンフレットに、京都コンサートホールや、財団主催の演奏会のチラシを挟み込む作業。挟み込むチラシは順番が決まっており、基本的には財団主催の演奏会→その他の演奏会の順で、日付順に重ねて挟み込む。速さと正確さが求められる。

・館内のコンサートガイド、チラシの補充

### 【所感】

今までコンサートホールとは、演奏会の観客としてか、出演者としてしか関わったことはなかった。しかし今回演奏会をつくる立場に立ってみて、ホールを支える様々な業務が連携を取り合うことで、一つ一つの演奏会が成り立っていること、そしてそれぞれの業務において、お客様や出演者の方々に対する細やかな配慮がなされていることを実感した。

ごく一部ではあるがコンサートの運営に携わったことで、コンサートホールや演奏会についてより深く考えることができた。これからは今回学んだことを活かして、音楽や演奏会により積極的に関わっていきたいと思う。

## 2 演劇関係

### 2.0 演劇学演習「劇場制作演習」

文学研究科教授 永田 靖

演劇学研究室では、平成 25 年度も兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）において、劇場制作の研修を行った。

研修期間は 10 月 8 日～12 日までの 5 日間である。研修する上演は、ピッコロ劇団第 47 回公演シェイクスピア作『間違いの喜劇』である。研修に先立ち、オリエンテーションを行い、研修の趣旨と目的を明確にした。その概要は以下の 4 点である。

- 1) 公立劇場の上演に参加することで、上演芸術がどのように舞台化されていくか、そのプロセスを実習する。そこでは多くの舞台裏での作業を土台としており、俳優の練習のみならず、スタッフや劇場制作部の仕事も数多く関わる。研修では劇団制作部の仕事に参加することでその具体的な仕事を体験的に行いながら、初日（12 日）までの数日を劇団とともに過ごす。
- 2) 本公演は「わくわくステージ」という一種の親子鑑賞演劇の枠組みの中での公演でもある。この公演の特徴とピッコロ劇団の本公演との特徴とを併せ持つと考えられる。両者は相互に関係を持ち合うのか、持ち合うとすればどのような点においてか。学童を対象としつつ一般成人も対象とする作品が成立するのはどのような要因によるのかを考察する。
- 3) 地域の演劇の現状と問題点を理解する。ピッコロ劇場は公立劇場としてはもっとも早い時期に創設され、以後継続的に活動が行われている日本の地域演劇の成功例の一つである。ここにおいてなにゆえ地域演劇は成功していると思われるのか、しかしさらにどのような問題を孕んでいるのか考察する。
- 4) シェイクスピア『間違いの喜劇』の上演に参加することで、いわゆる「古典」作品がどのように観客一般に理解され、受け入れられるものとして作られているのか理解する。新劇一般の不振が続く中でピッコロ劇場は一定程度継続的に近代翻訳劇を上演することができ、一定の評価も与えられている。その理由はどこにあるのか。実際に現場の側から考察していく。

以上の 4 点を概要とし、実際に 4 名の学生が研修した。研修後の報告書は以下の通り。演劇学研究室では平成 26 年もまたピッコロ劇場での研修を予定している。詳細は演劇学研究室まで。

## 2.1 兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター） インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

大学院文学研究科 修士課程 山本 知伽

### 1 はじめに

本報告書は、平成25年10月8日から10月12日まで参加させて頂いた、兵庫県立青少年創造劇場（以下、ピッコロシアター）におけるインターンシップについて記したものである。

まず、私がピッコロシアターのインターンシップへ参加を志望した理由は、「演劇の現場を体験したい」という思いからであった。1つの公演が初日を迎えるまでの直近の5日間を体験させて頂くことは、座学とはまた違った角度からの学びを得ることができると考えたためである。

実際に5日間のインターンシップを通して生の現場を拝見させて頂いた結果、前述した本懐を遂げることができただけでなく、たくさんの貴重な出会いと新たな知識を得ることができた。以下に、スケジュールと経過の詳細を記す。

### 2 経過報告

#### 10月1日（火） オリエンテーション

13時より、永田教授による事前学習が行われた。研修の大まかな流れを記した資料をもとに、心構えや注意点をご教示頂いた。

#### 10月8日（火） インターンシップ1日目

##### 【スケジュール】

- ・大鳥館長挨拶
- ・研修概要説明（尾西副課長）
- ・バックステージツアー（安積専門員）
- ・事業企画・劇場制作について（田房副課長）
- ・演劇学校説明（尾西副課長）
- ・演劇学校授業見学（尾西副課長）

※括弧内は担当して下さった職員の方

##### 【経過詳細】

まずは尾西氏に案内して頂き、大鳥館長にご挨拶をした。激励のお言葉を頂き、身が引き締まる思いになった。続いて、尾西氏による研修概要の説明があった。インターンシップ中お世話になる職員の方々の経歴等を紹介して頂いたのだが、国内外で活躍している方が多数おられ、驚くと共に尊敬の念を抱いた。

続いては安積氏引率の下、大ホールを見学した。舞台上では照明のシュート作業が行われていたため、残念ながら仕込みの見学はできなかった。しかし、実際に照明室や音響卓を目にしたことや、照明室で作業をなさっている方を間近で拝見したことで、現場の緊張感を味わうこ

とができた。また、安積氏から、上演の際に使用されている音響機材や照明で使用される「ネタ」のカタログを見せて頂き、改めて現場の方の知識の深さを知った。印象的だったのは、機材の発達についてのお話である。現在、照明はLEDに（普及はまだ先とのことであるが）、音響はMDやCDではなくSDカード等で管理されるようになりつつあるとのことで、操作もPSP等でできるようにまでなっているらしい。しかし、このような機材の発達は、高性能性を備えている一方で、それを操作する人材をどう育成していくかという問題もあり、プラスの面だけではないようである。

そして、田房氏から事業企画および劇場制作についてのお話があった。主催事業・共催事業、そして貸館事業など、ピッコロシアターの様々な劇場としての在り方を知った。公演の企画は大体一年前から始動するとのことで、まだ公演の詳細が分からない段階からの広報活動は相当な苦労があるだろうと思った。また、ピッコロシアターは地域に根づいた公共劇場として、ユニークな企画を多数立案している。ここでは、シアタースタート「ビーンズドリーム」という企画の紹介があった。この企画は田房氏が立案されたそうで、子育て中の親が未就学児童を連れて公演を楽しむことができるというものである。一般の公演は未就学児童の入場が禁止されていることが多いだけに、芸術振興に尽力している兵庫県に生まれ、このような企画を体験することができる児童たちは恵まれた環境であると感じた。

そして、再び尾西氏の方から演劇学校の説明があった。演劇学校は本科（昭和58年設置）と研究科（昭和59年設置）によって構成されており、授業は週に2日行われ、3学期制であるとのことであった。演劇学校について概説して頂いた後、約1ヵ月後に控えた合同発表会のレッスンを拝見した。講師の方と生徒の方々の、熱がこもっていながらも和気藹々とした雰囲気印象的であった。

#### 10月9日（水） インターンシップ2日目

##### 【スケジュール】

- ・チラシ挟み込み補助（貴田部員）
- ・公演制作の実際（田窪専門員）
- ・劇場概要説明（井上部長）
- ・舞台技術学校説明（中西主任）
- ・舞台技術学校授業見学（中西主任）

##### 【経過詳細】

この日はチラシの挟み込み作業から一日が始まった。まず、劇場ロビーに並べられたチラシの種類之多さに驚く。挟み込み作業の経験はあったが、こんなにも多種のチラシを挟み込むのは初めてのことであった。貴田氏のとりまとめの下、インターンシップ生以外にも多数の人が協力し挟み込みを行っていた。観客として劇場へ行った際に座席に撒かれているチラシの束の裏に、大勢の人の汗と根気があるのだなと再認識させられた。充実した作業時間ではあったの

だが、思い浮かんだのが「チラシの電子化」というアイデアである。電子化に伴う新たな道づくりが必要になるにせよ、チラシを組む時間および人件費の縮小になるのではと考えた。

続いては、田窪氏より公演制作についてのお話があった。「文化芸術振興基本法」や「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」から、アートの意義を考えるという趣旨であった。ピッコロシアターは、老人施設などに赴いて上演することによって、アートによる社会的弱者を包み込んだ社会づくり（社会包摂）を実践されているというお話に感銘を受けた。

そして、場所を変え、井上氏より劇場の概要についての説明があった。興味深かったのが、利用者が劇場に入った際は必ず事務所を通らないといけない導線にしてあるというお話であった。これは、職員の方が直接利用者の顔を見ることができるようという配慮からとのことで、実際、私たちもインターンシップ初日にピッコロシアターに足を踏み入れた際に、まず事務所の前を通って職員の方を拝見できたことで、「開けた」施設であるという印象を受けたことを思い出した。その他にも、音響の全面修復やエレベーターの耐震工事、そして内階段の手すりの設置等、施設の運営にあたって様々な努力をされており、ピッコロシアターが約20年の歴史をもつ所以を垣間見たような気がした。

その後、中西氏よりピッコロ舞台技術学校の説明があった。舞台技術学校は、週に2回、18歳から61歳までの生徒が集い、美術コース・照明コース・音響コースの3コースに分かれて授業を行っているとのことで、DVDで発表会の様子を見せて頂いた。映像ではバンドが演奏する課題曲の抑揚やブレイクに合わせて照明が美しく移り変わっていたのだが、そこに至るまでに、何度も繰り返しリハーサルをしたという逸話が興味深かった。

その後は、引き続き中西氏に案内して頂き、実際に照明コースと音響コースの授業を見学した。照明コースでは、講師の方のご指導の下、生徒の方々がシェートの練習を行っていた。ネタを使ってシャープエッジや青ぼけ・赤ぼけ等の調節をなさっていたのだが、手先の器用さとセンスが要求される作業だと感じた。そして、音響コースではSEの編集作業が行われていた。スクリーンに映した編集画面を前に、生徒の方々が何台ものパソコンで作業しておられた姿が印象的であった。授業の終わりに講師の方がおっしゃっていた、エレベーションから受けたイメージによって音のニュアンスを変化させるという旨のお話が興味深かった。

公演において何気なく耳にし、目にしている音響や照明も、ひとびとの手によって創られていることを改めて実感し、ゲネプロを前に身の引き締まる思いであった。

10月10日（木） インターンシップ3日目

【スケジュール】

- ・劇団概要説明（田窪専門員）
- ・広報業務について（古川副課長）
- ・劇団公演『間違いの喜劇』ゲネプロ見学
- ・劇場の今昔（高井相談員）

### 【経過詳細】

インターン3日目は、まず、田窪氏に演劇における制作の仕事についてのお話を伺った。ここでは、演劇をつくる上での重要なポジションの説明や具体的な制作の仕事について体系的に学ぶことができた。上演演目の企画立案についてのレクチャーにて、2012年の日本映画の興行収入のベスト10のうちほとんどが原作ものであり、現在、演劇界においてもメディアミックスがヒット作品を生み出す鍵であるというお話があった。実際に、ピッコロシアターにおいても、玉岡かおるさんが著した『お家さん』という小説の舞台化が予定されており、メディアミックスを実践されている。説明があった後、実際にインターンシップ生で大学生をターゲットにした原作ものの演劇を考え、一人一人プレゼンテーションをするという課題を頂き、実践の難しさを体験することができた。メディアミックスを実現させる企画を生み出すためには、普段から舞台化が見込めそうな小説やアニメ、映画のリサーチをすることが肝要であると感じた。最後は、各自プレゼンした5つの企画を投票で1つに絞ることになり、幸いなことに、私が立案した朝井リョウさん作の小説『何者』の舞台化の企画を選んで頂いた。ぜひピッコロシアターにて舞台化して頂きたいと思う。

続いて、古川氏から広報というお仕事についてのお話があった。広報の主な業務から民間の劇場と公共の劇場の違いなどを教えて頂いた。「広報」は新聞等の既存の媒体に記事を載せてもらうことであるのに対して、「宣伝」は金銭を使用しTVスポットや雑誌の媒体を購入するという違いは、知っているようで知らなかった。

その後、大ホールにて『間違いの喜劇』のゲネプロを見学させて頂いた。関係者の方々がまばらに在るだけの客席は、今まで味わったことのない独特の緊張感漂う雰囲気があった。諸々のタイミング等個人的に違和感を覚える部分もあったが、残念ながらダメ出しに立ち会うことはできなかった。演出家の孫氏がどのような箇所に違和感を覚え、実際にどのようなダメを出されていたのかをぜひお聞きしたかった。

続いて、高井氏による劇場の今昔およびアートマネジメントについてのお話があった。高井氏は、あえてネガティブな視点から演劇を見つめることで、私たちに今日の演劇界における諸問題を提起して下さった。現在の傾向として、演劇に教養を求めるのではなくエンターテインメントに終始している点が上演作品の質の不明確性に繋がっているという旨のご指摘にははっとした。高井氏が投げかけて下さった「劇場は衰退産業か？」という問いは、今後も考え続けなければならない大きなテーマであると感じた。

10月11日（金） インターンシップ4日目

### 【スケジュール】

- ・劇団公演『間違いの喜劇』わくわくステージ鑑賞
- ・わくわく解説見学
- ・世界の劇場、海外公演制作（山本副課長）
- ・舞台裏見学および舞台技術学校授業見学（安積専門員）

### 【経過詳細】

この日は、中学生を対象としたわくわくステージを鑑賞させて頂いた。昨日の人もまばらな客席とは異なり、中学生を湛えた劇場は、学生たちの澁刺たる様子も相まって活気溢れる空間に様変わりしていた。前日のゲネプロで少しだけ違和感を覚えた微細なアクションまですべて調整されており、演出家の孫氏および役者の方々のプロフェッショナルな仕事に感服した。終幕後には、舞台上に孫氏と舞台監督の鈴木田氏が登場し、演出や機構についての説明があった。舞台奥のスクリーンに映った人影が大きくなったり小さくなったりする演出は、役者がスクリーンの後ろに設置された照明に近づいたり離れたりするという仕組みであることを知る事が出来、私にとっても非常に勉強になった。このように上演後に舞台裏の説明を加える企画は、中学生が裏方の仕事に興味を持つ契機になる素晴らしい試みだと思った。

その後、山本氏から世界の劇場や海外公演制作についてのお話があった。山本氏は、『さらって行ってよピーターパン』という作品の米国シアトル公演の制作を担当されており、当時の制作秘話を伺うことができた。とりわけ興味深かったのが、アメリカと日本の契約形態の違いである。アメリカは契約社会であり、ユニオン（労働組合）がしっかりと存在するため、俳優やスタッフの労働時間および休暇時間は遵守されなければならない。一方、日本の演劇スタッフは仕込み等が忙しい時は休憩を押して作業をすることがままあり、そこに違いがあるというお話であった。これは、ただの「違い」に留めおく問題ではなく、現在の日本演劇界において重要な課題であると感じた。私自身、他の劇場等において制作の手伝いと称して無給で一作品を無料で観ることができるという報奨はあるが一公演の案内や受け付け等の制作業務を手伝うことがある。もちろん、自らの実りになるという思いから主体的にやらせて頂いているのだが、日本の演劇界はそういった「横のつながり」が重視され、アメリカで重視されている「契約」という部分が軽視されているのではないかという疑念がある。アメリカのミュージカル界でも、1975年にミュージシャンが給与の待遇改善を要求してストライキを起こし、その間いくつかの公演がクローズするという騒動が起こっている。その結果、彼らは賃上げを獲得したという歴史があるだけに、日本の演劇界においても、待遇を改善するためには、スタッフおよび役者が自ら声を上げることも一手なのではないかと考えた。

話を戻す。その後、安積氏に引率して頂き、再びバックステージを見学することができた。『間違いの喜劇』の舞台装置や、キャットウォーク、衣裳部屋等、普段見ることのできない場所に案内して頂き、感嘆の声を上げることしかできなかった。ステージに上がり、舞台装置を見学している最中に、『間違いの喜劇』の舞台美術を担当された加藤登美子さんにお目にかかることができ、非常に感激した。その後、安積氏から、女性のスタッフの増加に伴う機材の改良が進んでいるとのお話を伺った。女性スタッフが増えた理由をお尋ねすると、舞台技術学校のような裏方の専門学校や大学が増えたことを答えとして挙げられていた。舞台裏を見学させて頂いたことで、明日に控えた公演が更に楽しみになった。



## 10月12日(土) インターンシップ5日目

### 【スケジュール】

- ・チラシ挟み込み作業
- ・開場準備
- ・劇団公演『間違いの喜劇』公演時制作補助
- ・チケットの切り分け作業

### 【経過詳細】

インターンシップ最終日のこの日は、一般の方を対象とした『間違いの喜劇』公演の初日であった。まず、ピッコロシアターに到着し、道路を隔てた劇団部に楽屋を間借りさせて頂いた。そして、遅れて到着したチラシを9日に組んだ分のチラシに挟み込む作業を行った。

その後、田窪氏から表方業務に関する説明を受けた。主だった業務は、もぎり・受付・チラシのお渡し・客席案内で、主にお手洗いの位置、お客様へのチラシの渡し方、開演直前の扉の開閉などについて詳細にレクチャーして頂いた。開場まで時間があったので、劇場ロビーに飾ってある歴代の公演のワンシーンを映した壁掛け写真についての説明を受けた。往年のスターたちがこの場所で公演をしていたのだと思うと感慨深い思いになった。

インターンシップ生で業務の担当を振り分けた結果、私は上手側の客席案内を担当することになった。私が担当した扉は入口から遠い位置だったため、残念ながらお客様をご案内する機会はあまり多くなかった。最初こそ緊張したものの、客席図を覚える時間を与えて頂いていたこともあり、間違ってお席にご案内することはなく一先ず安心した。開演中は、上手後方に席を設けさせて頂き、気分が悪くなったお客様がいないかなどの客席チェックを行った。幸い、上演中のトラブルはなかった。終幕すると、事前に田窪氏にレクチャーして頂いた通り、客電が点き、終演のアナウンスが流れたことを確認してから、客席後方と前方二手の扉を開放した。すべてのお客様をお見送りした後、場内の表示を明日のものに張り替える作業をし、公演に関する業務は終了した。

以前、コンサートスタッフのアルバイトをしていたこともあり、表方の仕事は一通り学んでいたが、改めて劇場の機構に関する深い知識が要求される責任のある仕事だと感じた。しかし、直接お客様のお顔を見て仕事ができることは非常にやりがいがあった。また、中学生を対象とした上演と一般の方を対象とした上演—前者よりも客席の年齢層が高めであった—を連日観させて頂いたことによって、客層の変化に伴う観客の反応の違いに気づくことができた。具体的には、前者は主に役者の身体的動作や身振り—『間違いの喜劇』に特有なオーバーアクション—に対して笑いが起こっていたことに対して、後者は物語の筋や台詞の妙に対して笑いが起こることが多かった。このような差異を肌で感じ、演劇における客層の事前リサーチおよびお客様の年齢層を意識した演目選びの重要性を改めて実感した。

その後、大段氏にレクチャーして頂き、コピーされたばかりの『星つむぎの歌』のチケットを切り分ける作業を事務所にて行った。切り分けられたチケットは、各プレイガイドにお席を

振り分けて販売するとのことであり、座席の割り当ての分布図が興味深かった。

作業を終えた後、最後に職員の皆さんにご挨拶をさせて頂き、インターンシップの全工程が終了した。

そして、尾西氏のご厚意により、演劇学校にて行われた別役実さんの特別講義を聴講させて頂いた後、20時頃に退館した。

### 3 おわりに

この度のインターンシップでは、公共劇場としてのピッコロシアターの在り方のみならず、演劇そのものの存在意義にまで視野を広げて考えることができた。5日間にわたり、ピッコロシアターで働く様々なセクションの方々にお話を伺って思ったのは、兵庫県およびピッコロシアターが演劇という存在を守ろうとしているということである。全国的な経済不況が続く中で、芸術が人々の生活の中で在り続けることは容易いことではないかもしれない。しかし、演劇という文化を守り、後代に伝えていくために様々な取り組みを行っているピッコロシアターのような劇場の存在は、現在の苦境を必ずや切り開くものであると確信している。願わくは、兵庫県のみならず、他の地域でも同様の取り組みが普及してほしいものである。

最後に、このような貴重な経験を提供して下さったピッコロシアターおよび大阪大学に深く感謝して、本報告書を閉じたい。

## 2.2 ピッコロシアターインターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 武宮 由佳

平成 25 年 10 月 8 日から 12 日までの 5 日間、兵庫県立青少年創造劇場にてインターンシップに参加させていただいた。まずは時系列に沿ってインターンシップの内容を記してから、兵庫県立青少年創造劇場の地域または社会における役割とその取り組みについて考察する。

### 10 月 8 日 (火) : インターンシップ 1 日目

- ・大鳥館長挨拶
- ・研修概要説明
- ・バックステージツアー
- ・事業企画・劇場制作について
- ・ピッコロ演劇学校説明
- ・演劇学校授業見学

来館してまずはお世話になる大鳥館長と職員の皆様への挨拶。館長より色々な意見を出してほしいというお言葉をいただく。

その後にインターンシップ受け入れを担当して下さった尾西さんより研修の概要説明を受ける。今回の研修についての説明をうかがうと同時に霜康司さんのお話や新聞広告の効果についてのお話をうかがった。演劇を行っていく際の経済面や社会的役割などの問題点を感じ、それらに対してどのように向き合っているのか、インターンシップで見るべきことを考えた。

今回公演が行われる大ホールのステージの裏側に連れて行っていただいた。しかし、ちょうど照明のシュート中であったためステージの袖に入ることは出来ず、調光室などを安積さんの説明を受けながら見学させていただいた。照明の記憶卓など実際の機材を見ると華々しいステージの裏側で多くの技術が駆使され精密な調整が行われているのだと実感した。地階のせりにも案内していただき、安全のためにどのような工夫がされているのかを教えていただいた。その後様々な目的に合わせて作られたマイクや照明に色を付けるカラーフィルターを見せていただいた。LED 照明も近年増えており、今、音響機材や照明機材はデジタルへの過渡期にあるという安積さんのお言葉が印象的だった。

予定を変更して、次にピッコロ演劇学校の説明をしていただいた。公立としては日本初となるピッコロ演劇学校がどのように創設されたのか、またその目的について尾西さんからお話を伺った。

その後、事業企画・劇場制作についてのお話を田房さんから伺った。ピッコロシアターが行っている事業のうち主に主催や共催の事業をどのようにして企画するのか、また企画から公演当日までにどのようなことをしなければならないのかを説明していただいた。主催、共催事業と貸館事業とのバランスが大事だと田房さんはおっしゃっていた。また他にもピッコロシアタ

一では様々な企画があり、最近田房さんが企画、実現されたシアタースタートについても詳しくお話を伺った。観客層を固定することなく赤ちゃんからお年寄りまで多くの人が劇場に足を運んでくれるように様々な企画をされているのが興味深かった。

ピッコロ演劇学校の実際の授業を見学させていただいた。ピッコロ演劇学校は本科と研究科に分かれており、それぞれ秋の中間発表となる公演に向けての稽古をされていた。本科では少人数のグループに分かれて互いに意見を出し合いながらの稽古であった。研究科では全員で一つの作品を作るべく、それぞれが演出家の言葉を熱心に聞いてより自分の役を深めているのが印象的だった。

### **10月9日(水)：インターンシップ2日目**

- ・チラシ挟込み補助
- ・公演制作の実際
- ・劇場概要説明
- ・ピッコロ舞台技術学校説明
- ・舞台技術学校授業見学

2日目はまずチラシの挟込みをお手伝いさせていただいた。挟込みとは観劇に行った際に受け取るパンフレットや他の公演のチラシを観客に渡せるようにまとめる作業のことである。長机にチラシを並べて一枚ずつ取ってパンフレットにまとめていく。実際に観客の手に渡る物なので丁寧さと正確さ、作業のスピードが求められた。

挟込み作業の後、ピッコロ劇団制作部の田窪さんからピッコロシアターが県立劇団をもって公演を実施する意義についてお話を伺った。法律という観点からアートの必要性について見た時、社会的包摂のためにもアートが必要なのではないかと、そのためには市場原理で残る劇団だけでなく公立の劇団が必要なのではないかと考えた。

業務部部長の井上さんにピッコロシアターの概要を説明していただいた。ピッコロシアターの概要をお話していただき、また安全のために機材や設備の管理が大事であることや利用者がピッコロシアターを利用しやすいような工夫、職員の教育についてお話を伺った。井上さんのお話によってピッコロシアターが観客のためだけでなく、いかに演じる側目線の劇場であるかを感じた。また利用者のために初めての試みにも挑戦されてきたことを学んだ。

次に技術学校担当の中西さんからピッコロ舞台技術学校についての説明をうかがった。DVDを用いて説明してくださり、ピッコロ舞台技術学校でどのような技術が学べるのかを知った。その後、実際に授業を見学させていただいた。機材やソフトの扱い方について学んでおり、素晴らしい音響、照明効果のためにはこのような知識を学ぶ必要があるのだと感じた。

### **10月10日(木)：インターンシップ3日目**

- ・劇団概要説明

- ・広報業務について
- ・劇団公演《間違いの喜劇》ゲネプロ見学
- ・劇場の今昔

田窪さんと公演制作について考え、実際に企画を立案した。大学生を観客層とした公演を企画するならばどのような作品がいいかをそれぞれが考え話し合った。非常に難しく、企画立案の大変さを感じた。

その後に古川さんより広報についてのお話を伺った。その日に古川さんがするお仕事のリストを参照しながら広報とはどんな仕事なのかを教えていただいた。広報と宣伝の違いや公演の広報と劇場そのものの広報の違いをお話しただく中で、公立劇場だからできることをやっていくのが重要であるというお話が印象的だった。

今回のピッコロ劇団の公演である《間違いの喜劇》のゲネプロを見学させていただいた。しばしば違和感がある点があったが、ほぼ完成しているのではないかという印象を受けた。喜劇と銘打っているのに関係者の方々から笑い声があまりなかったのが気になった。

高井さんからは劇場や演劇についての問題点を伺った。劇場は衰退産業であるというお話や、観客や俳優の資質のお話など、厳しい現実についてお話しいただけた。かつての演劇界や海外と比較すると現代では観客の質の低下や役者の怠慢などの諸問題が山積みであり、負の連鎖に陥っているように思われた。

#### **10月11日(金)：インターンシップ4日目**

- ・劇団公演《間違いの喜劇》わくわくステージ鑑賞
- ・わくわく解説見学
- ・世界の劇場・海外公演制作
- ・舞台技術学校授業見学

《間違いの喜劇》のわくわくステージを鑑賞させていただいた。わくわくステージとは中学生の団体鑑賞のことであり、上演後に舞台監督と演出家による解説が聞けるというものだ。開演するまでは友達とおしゃべりするなどがやがやしていた中学生たちも幕が開く前の暗転によって静かになり集中して作品を鑑賞していた。劇場の空気のすごさに感動した。中学生たちは役者のコミカルな動きや話し方など、面白いシーンであるというのがわかりやすいところでよく笑っていた。そのあとのわくわく解説でもバトンを下ろしたり大道具を見せたり影絵のしくみを説明されたりすると素直な反応を見せていた。しかし終演後に劇場から出てきた中学生たちが「難しくてよくわからなかった」と話し合っていたのを聞いた。確かに事前にこの作品について知らなければ、冒頭部分で双子を取り違いしていることに気づかず、観客にもよくわからないまま進んで行ってしまうのかもしれないと考えた。

その後、山本さんよりご自身の海外公演の経験を中心に世界の劇場についてお話を伺った。

『さらって行ってよピーターパン』のアメリカ公演では契約や法律が不安だったり、衣装や小道具の運搬に苦労したり、ユニオンが厳しく思い通りにいかないこともあったそうだ。さらにフランスでの観劇体験についてもお話しいただいた。山本さんの「いい芝居は言葉がわからなくてもわかる」というお言葉が印象的だった。またロシアの演劇界についても触れられ、日本の俳優は俳優になるための勉強をしていないことが多いという問題を指摘され、海外と日本の違いを感じた。

劇場のバックステージを安積さんに連れて行っていただいていた見学した。今回は舞台そのものや幕裏を見ることが出来た。上演を観ていたため、実際の舞台や小道具を間近に見ることが出来て感激した。オペレーターだけでなくメンテナンスも劇場スタッフの大事な仕事であることを教えていただいた。また近年では軽い機材や細くて丈夫なロープの導入など、女性が働ける職場づくりも行われており、現代では舞台スタッフは就職の選択肢の一つとして考えられているのだと伺った。その後地下で作業中の舞台技術学校の授業を見学させていただいた。舞台制作のために大きな木材を切っていたのは女性の方であった。先日見学させていただいた照明コース、音響コースにも女性が多く、特に照明コースはほとんどの生徒が女性で講師も女性の方だった。

#### **10月12日(土)：インターンシップ5日目**

- ・公演当日会場準備
- ・劇団公演《間違いの喜劇》公演時制作補助
- ・劇団公演《間違いの喜劇》一般公演鑑賞
- ・整理作業

一般公演の初日の準備をお手伝いした。まず後挟みのチラシをパンフレットに挟み込む作業を行った。丁寧に挟み込みをしていたつもりだったが、しばしばパンフレットが2冊入っていたり、同じチラシが2枚入っていたりした。お客様は一人一人がそのお芝居を楽しみに来てくださるのだからきちんとしたものをお渡ししたいと思い、作業はより丁寧に行った。

インターンシップ生はもぎりやパンフレットのお渡しなどの受付周り、場内のご案内の二手に分かれた。私はチケットのもぎりを行った。迅速かつ丁寧にしなければチケットが破れてしまったりお客様をお待たせしてしまったりするので少し緊張しつつも笑顔で対応することを心掛けた。その回は車椅子でご来場のお客様がいらっしや、その対応のために今回の制作担当の貴田さんや田窪さんはお忙しそうだった。場内のスタッフはその場その場に合わせて臨機応変に対応することが求められるのだと感じた。

開演してからチケットの整理を行い、その後公演を鑑賞させていただいた。わくわくステージとの変更点が多々あり印象が少し違っていた。観客の年齢層は高めで年配の方も多くいらっしや。中学生と違って、言葉遊びや台詞回しで笑いが起こることが多かったように感じた。終演後、アンケートを記入して下さる方が多かった。大ホールの外にあるソファは座り心地は

いいがかなり沈み、またテーブルも低めでソファの横に置いてあるものが多かったので、ものを書いたりするのは不向きかも知れないと感じた。

ご案内の紙を張り替えたりといった整理作業をして、五日間のインターンシップは終了となった。最後にお世話になった大鳥館長と職員の皆様にご挨拶させていただいた。演劇が多くの人に支えられていることを改めて感じたこと、皆様のお話を将来を考える際に役立てたいことなど感謝の気持ちを述べた。

ではインターンシップで何うことが出来たお話を基に「公立劇場」としての役割や取り組み、また実際に感じた問題点についてまとめる。

公立劇場としての役割を考えるとやはり人と社会をつなぐものとしてのアートは重要な存在である。また、すべての人が分け隔てなく利用できるような劇場、というのも公立劇場に求められる姿なのではないだろうか。障がい者施設や老人施設、小学校などに出向いて公演を行うといった取り組みもこの役割を果たすために必要である。また子供向けの事業も充実しており、ワークショップや赤ちゃんと楽しめる公演などの企画があった。しかしそれに比べて、老人向け、障がい者向けの事業はあまり印象に残らなかった。すべての人に利用しやすくするためにはバリアフリーに出来ればいいのかも知れないが、その前にエレベーターやお手洗いへのご案内をもっと親切にしてもいいのではないかと感じた。座席を取り外して車椅子のまま観劇できるということを活かした取り組みや、様々な人をターゲットにしたワークショップも考えられるだろう。演劇をコミュニケーションツールとして用いて、人と人をつなぐ企画を考えるのも公立劇場ならではの点だと思う。そういった点で取り組めることは多くあると感じた。

ピッコロシアターの事業運営方針を参照すると「地域」というのがキーワードとして何度か登場する。インターンシップでも「地域性」や「地域での活動」というのがよく考えられているのだと感じた。地元の歴史や文化、アーティストを使うことで地域での演劇活動を行っている。来年2月に上演される『お家さん』も地域に根差した作品のひとつと言える。そこで疑問に思ったのは「地域」とは何か、ということである。一体どの範囲のことをさしているのか、地域を特徴づけるものは何か、といったことが曖昧な気がした。何かひとつ、この地域を代表する作品だと胸を張って言える面白い作品があれば、それを毎年上演するというのも地域を特徴づけるのに役立つかもしれない。また、地域の活性化や地域とつながるということを考えるのであれば、劇場の外での活動が重要だと感じた。その点で図書館との連携は効果的だと思う。このような劇場外での活動がいままで観劇をしたことがない新たな観客を呼び、公立の施設としての知名度をあげることになるのではないだろうか。駅や商店街や学校、図書館などの施設、文化団体や自治体との連携事業によって地域のいたるところでピッコロシアター協働の取り組みが行われていれば、ピッコロシアターが「地域」を重んじ活性化に努めているということは誰の目にも明らかになるだろう。

また人材育成というのもピッコロシアターが掲げる目的の一つである。そのために演劇学校や舞台技術学校の運営を行っている。また青少年のうちからより上質な演劇を鑑賞する機会を

提供することも目的を果たすために行われていることだろう。インターンシップで実感した日本の演劇環境の甘さを引き締めるのもピッコロシアターに出来ることなのかもしれない。俳優やスタッフの質の向上には演劇学校、舞台技術学校で努め、観客の質の向上には幼いころから良い演劇体験の機会を提供することで取り組めるのではないかと思った。また資料室に多くの資料が揃えられていたので、それらの活用も重要な取り組みである。

以上のように、ピッコロシアターは「公立劇場」としての役割を果たすために様々な企画や事業に取り組んでいる。しかし、今回インターンシップに参加させていただいて初めて知った取り組みも多かったので、地域の方々は本当にピッコロシアターの事業をご存じなのだろうかかと疑問に思った。色々な点でもう一步踏み込めるところがあるのではないだろうか。ピッコロシアターの皆様の努力がもっと世間に広まり、評価されて欲しいと思う。そのことでまた新たな公立劇場の創立や制度の整備が行われれば、日本の演劇界の活性化につながるだろう。

最後に、今回ピッコロシアターでのインターンシップという貴重な体験をさせてくださった皆様、本当にありがとうございました。



## 2.3 ピッコロシアターでのインターンについて

〔学生からの報告〕

文学部 4 回生 演劇学専修 橋場 あゆみ

### 0、はじめに

2013 年 10 月 8 日から 10 月 12 日までの 5 日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場、一般にはピッコロシアターの愛称で親しまれる公立劇場でのインターンシップに参加する機会を得た。この期間は、同劇場の第 47 回公演である『間違いの喜劇』の仕込みから一般公演初日までにあたる期間でもあった。そのため私たちは、ゲネプロから実際の観客を入れた上演まで、普段は目にすることのない劇場の「舞台裏」を見せて頂くことができた。また、このピッコロシアターが、日本では稀な座付きの公立劇場であり、公立劇場では初の演劇学校、舞台技術学校を備えた劇場であることから、その取り組みについてもお話をうかがうことができた。ここでは、様々な職員の方々のお話を合わせて、公立劇場や、演劇の今日における問題等について、自分の意見を加えながら述べたい。

### 1、公立劇場としてのピッコロシアター

国や自治体が、税金を使って芸術文化を振興する必要性の根拠として、以下の 3 つの法律が挙げられる。1. 国民に「健康で文化的な最低限度の生活」を保障する憲法 25 条、2. 平成 13 年に制定された「文化芸術振興基本法」、3. 平成 24 年に制定された、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」である。これらの法律に基づいて、国は国民が等しく芸術に触れる権利を保障している。しかし、演劇へのアクセスには様々な格差がある。まず、劇場が東京に一極集中していること、そして、民間劇団の高額な芝居のチケット代を支払う余裕がある人は限られているということだ。これらの格差を解消するために、演劇過疎の地域である関西にも公立の劇場が創られた。兵庫県では、もともとアマチュア演劇が盛んであったため、演劇の鑑賞ではなく、県民自ら演技をする劇場という視点から、ピッコロシアターが創られた。ピッコロとはイタリア語で「小さな」という意味を表す言葉で、この劇場は実際小さいが、舞台の機構や設備に関してはアマチュアの劇団や演奏家の意見を大いに取り入れ高評価を得ているということだ。このピッコロシアターと対照をなす公立劇場として、静岡県の「SPAC」が挙げられる。同じ座付きの公立劇場であるが、SPAC は貸し館事業を行わない。これは、劇場は公立劇団専属の施設であるという考えに基づくものであるようだ。SPAC のこのような方針は、住民に開かれていない劇場というイメージを与えるだろう。しかしながら、ヨーロッパの劇場では、劇場にはそれぞれランクがあり、アマチュア劇団が利用することのできる劇場は限られているのだという。SPAC は、貸し館事業を行わない代わりに、鑑賞劇場としての役割に力を入れているのだろう。公立劇場として、どちらのやり方が正しいのか、と問えば「どちらも善し悪し」という答えになるかもしれない。この問題は、演劇の役割の本質に関わるものではないかと思う。演劇は虚構の設定と筋書を持つという点では文学と共通している。また、人が演じるといふ点では映画と共通している。では、演劇の独自性とは何か、といえ、それはやはり観客と

演じ手が同じ空間と時間軸を共有すること、そしてその刹那性ではないかと思う。また、このような演劇の特徴は、日常のコミュニケーションと似通っている。人と人が対面で言葉を交わし、他者から見られている自分を意識しながら、行動する。そして、この「人から見られている自分」を意識するためには、演劇を鑑賞するだけでなく、自ら演じる必要がある。このような演劇の独自性を抽出し、芸術以外の場に応用したものに、ロールプレイングがある。高次元から自分自身を認識する能力を養うことは、コミュニケーションスキルの向上にもつながるとの考えから、司法矯正から企業の新人研修まで、実に様々な場面で利用されている。公が国民に演劇を提供する意義として、「演じる」体験によって得られるこのようなアドバンテージを人々が隔てなく享受できるようにすることも含まれるのだとしたら、公立劇場の運営に貸し館事業は不可欠なのではないかと思う。

## 2、演劇のネガティブ面

映画、TV、インターネットの発達により娯楽が増えた現在、演劇は衰退産業とも言われる。入場料収入で資金を賄っている劇団はごく少数である。TVやネットなど、安価で楽しめる娯楽があるなか、高額なチケットを購入して演劇を見に来る人々は、その芝居に投資している。誰しも、投資するからには失敗したくない、有望株を選ぶ。その結果、集客力のある大規模な劇団にますます人が集まる。しかし、そこで選ばれる劇団の芝居は、本当に優れているのだろうか。劇団は観客を呼ぶために、有名な役者を起用するかもしれない。広告費に多額の費用をかけるかもしれない。知名度のある作品を上演し、チケットに投資する人々に安心感を与えるかもしれない。原作がヒットした漫画やドラマを舞台化し、新しい顧客を劇場に呼び込もうとするかもしれない。しかし、そうして作られる芝居は、はたして優れているのだろうか、質が高いものだろうか。観客は、そもそも演劇を見る目を持った人々だろうか。彼らは、芝居を観にきているのではなく、お気に入りの役者を生で見たいだけかもしれない。または、「〇〇劇団の芝居を観に来ている自分たち」に満足しているだけかもしれない。本当に芝居の善し悪しを理解し、内容を楽しんでいるのだろうか。演劇には、大衆の道德心の向上などの教育的意義があったという。しかし、現在の演劇はテーマを喪失している。「教養でもなく、エンターテインメントでもない作品が多い。」と高井相談員はおっしゃっていた。また、役者の怠慢も問題である。俳優は、セリフを覚えて、読むことさえできれば、ひとまず誰でも名乗ることができる。日本のテレビ俳優などで、役者としての基礎訓練を十分に積んだ人はどれくらいいるだろう。滑舌も悪く、身体のしなやかさもない。表情も硬い。TVでは、このような質の低い演技が垂れ流される。劇場に足を運ばない(運べない)人々が、その芝居を観る。その演技に満足するのか、芝居というものの自体がつまらないものと思ひ、興味をなくしてしまうのか、そのどちらかではないだろうか。ピッコロ劇団のチケットは、民間劇団と比べればはるかに安い、しかし、映画やテレビはもっと安い。演劇鑑賞に費やすお金、時間、興味を持たない人々が触れる唯一の演技がTVや映画俳優の演技だとしたら、それこそ最も質の高いものでなければならないのではないだろうか。子供のころからTVで垂れ流される演技に慣れてしまえば、演劇を見る目も育

たず、演劇に興味を向けることもなく、劇場に足を運ぶようにもならないだろう。

### 3、「演じる」ことの重要性

1、2を踏まえて、これからの演劇に求められるのは、鑑賞するだけでなく、自ら演じることの重要性ではないだろうか。かといって、プロの役者養成を目指すのではない。主体的に演劇にコミットする体験は、演劇への関心を高め、潜在的な演劇の鑑賞者を育てる。税金を投じて演劇を提供する意味があるかということについて、私は少し考えてしまう。税金は、社会の構成員全員が必要とする財に使うべきだ。では、演劇は、すべての人々から必要とされているかと言われれば、決してそうではない。まわりまわって何らかの恩恵を受けているにせよ、「演劇に全く興味がありません」という人ももちろんいる。その存在は認めなければならない。芸術としての演劇が社会に必要不可欠で、そのために税金を使うのは当然だと考えるならば、それは横暴だと思う。しかし、1でも述べたように、演劇固有の「演じる」という行為は、非常に汎用性のあるものだと考える。演劇の芸術として以外の可能性をもっと活用できれば、演劇は税金を投資すべき財たり得ると思う。ピッコロシアターの演劇学校には、親子ほども年齢が離れた、様々な立場の方が在籍しておられるという。この演劇学校での活動を通して、様々な人々がコミュニケーションを取り合い、演技力や、演劇への理解以上の何かを得ることができると、ここはまさに全ての人々に必要とされる劇場であると思う。

## 2.4 兵庫県立ピッコロ劇場インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部3回生 演劇学専修 橋 若菜

・はじめに

今回、2013年10月8日（火）～ 12日（土）までの5日間、兵庫県立ピッコロ劇場のインターンシップに参加させて頂いた。ここでは、具体的な活動内容及び活動を終えてみて感じたこと、考えさせられたことについて述べることによって、インターンシップ報告としたいと思う。

・インターンシップの流れ

【1日目 10月8日（火）】

大鳥館長挨拶	ピッコロシアターの館長である大鳥さんに挨拶をさせて頂き、職員の皆さんの前で実習生の簡単な自己紹介と挨拶をさせて頂き、実習がスタートした。
安積さんによるバックステージツアー	大阪大学演劇学研究室の卒業生で我々の先輩の尾西さんに研修概要の説明を受けたあと、照明家の安積さんにバックステージツアーを案内していただいた。バックステージツアーでは、劇場の機構と設備について詳しく説明していただいた。具体的には、調光室や音響室、舞台の地下部分のセリの見学をさせて頂き、調光室や音響室は普段観客として舞台を見に行った時には、足を踏み込める場所ではないので貴重な経験をさせて頂き、
田房さんによる事業企画・劇場制作について	劇場制作・買付けを担当されている田房さんから、事業企画及び劇場制作についてのお話を伺った。ピッコロ劇団ではなるべく偏りなくバラエティに富んだ公演が上演できるよう心掛けていらっしゃるそうだ。また、1年間のラインナップを決定する企画の仕事は、2, 3年前から計画、1年前から具体化するといった長期に渡る調整が必要であると言うことを学んだ。
尾西さんによる演劇学校説明・授業見学	演劇学校説明では、ピッコロシアターの演劇学校は開館5周年を記念して公立文化施設では全国で初めて設立され、平成4年には舞台美術学校も創設され、地域文化に根ざした文化活動のリーダーの育成と、日本の演劇創造に参加しようとする若者たちの夢を支えるための事業として展開されていることを学んだ。授業見学では、来

	月の合同発表会に向けて、本科と研究科に別れてそれぞれ稽古している様子を見学させていただいた。学校生の生き生きして楽しそうに稽古に取り組む姿勢が印象に残った。
--	--

【2日目 10月9日（水）】

チラシの挟み込み作業の補助	今回の公演の際に観客に配るチラシの挟み込み作業のお手伝いをさせていただいた。私にとっては初めての経験だったのでテンポ良く一枚一枚チラシをとっていく作業は、一種の鬼ごっこのような感覚で少し緊張した。しかし、普段観劇に行くと何気なく座席の上に置かれているこの一つ一つのチラシは全て人の手によって準備されていることに改めて気づかされ、チラシに対する意識が変わった。
田窪さんによる「公立文化施設としてのピッコロシアター」についての劇団概要説明	まず、「ピッコロシアターが県立劇団を持って、公演を実施する意義は？」という題のもと、演劇、アートに税金を使う必要があるのか？民間に任せておけば良いのではないか？という問題提起が田窪さんによってなされた。平成13年に定められた文化芸術振興基本法では、「文化芸術は、心豊かな活力ある社会の形成にとってきわめて重要な意義を持つ。」と明記されている。平成24年の劇場・音楽堂の活性化に関する法律では「劇場、音楽堂等は、国民の生活においていわば公共財とも言うべき存在。」と記されている。このように、劇場は社会参加の場としても有効活用されていると認知されている。また、民間の劇場に任せておくと市場原理に乗るもの以外残らなくなってくる。→税金が必要。こうした論旨で、ピッコロシアターの存在意義を説明していただいた。
井上さんによる劇場概要説明	ピッコロシアターつまり兵庫県立尼崎青少年創造劇場が設置された経緯、舞台設備などについて詳しく説明していただいた。その設置目的は、「青少年の自由な創造活動を促進し、併せて県民文化の高揚をはかることを目的に、兵庫県立尼崎青少年創造劇場を設置する。」というように、当初から地域の若者の演劇活動の場の提供を目的としていた。また、大ホールの奥行きは客席の2倍

	もあり、舞台と客席がフラットにつながっていることや、中ホールはリハーサルに最適な環境に作られているという特徴を伺った。
中西さんによる舞台技術学校説明及び授業見学	舞台技術学校の概要やカリキュラムなどの説明を受けた後、実際に学校生が授業を行っている様子を見学させていただきました。この日は、音響と照明の授業を見学させてもらったのだが、音響では音の編集作業のパソコン操作の練習を、照明では灯体にネタ（照明に模様の影を入れるための台紙）を入れてシュートする作業の練習を行っていた。舞台技術の実際の現場作業を近くで見る経験は初めてだったので、非常に興味深くわくわくした。

### 【3日目 10月10日（木）】

田窪さんによる「演劇における制作の仕事について・・・企画立案の一例」についてのディスカッション	演劇制作の流れについての概要を説明していただいた後、実習生自身が「大学生をターゲットにした、原作ものの演劇を一つ企画する」というワークショップを行った。企画意図や出演者、キャッチコピーまで実際に考えてみるという作業は、実際の企画業務を疑似体験することができとても楽しく感じた。が、その一方で、ニーズに合った企画を提案することの難しさや予算面での調整といった実際の仕事の苦勞などについても考えさせられた。
古川さんによる広報業務についての説明	古川さんのこの日の業務スケジュールのメモを元に、実際の広報業務がどのようなものであるのかということ詳しく説明していただいた。まず、広報と宣伝の違いについてだが、広報とは新聞などの既成媒体にどのような記事を発表してもらうかということ画策する業務であるのに対して、宣伝は資金を元に宣伝枠というものを購入することを目的とするそうである。ピッコロシアターでは、主に広報の方に力を入れているらしく、新聞記者が客観的な目線で記事を書いてくれる事を重要視している。
劇団公演「間違いの喜劇」ゲネプロ見学	ゲネプロの見学をさせていただいた。これは、私たち実習生が初めて今回の作品、「間違いの喜劇」を観劇させていただく機会でもあった。開幕してからは途中中断する

	<p>ことなく、ゲネプロが終了した。事前に、ゲネプロでは最終確認のため芝居を中断して細かい調整がたびたびなされる事がよくあると聞いていたため、今回はスムーズに終わってしまい打ち合わせの様子が見れず、少し残念に感じた。</p>
高井さんによる劇場の今昔について	<p>まずはじめに、高井さんから今回は演劇のネガティブな面についてディスカッションしてみたいとお言葉を伺った。現代の日本において演劇が直面している問題点を考えるということを行った。例えば、劇場は衰退産業か？や、演劇は役者のものか？観劇者のものか？といった問題提起を元に、演劇の抱える問題を考えさせられた時間はとても有意義であった。</p>

【4日目 10月11日（金）】

劇団公演「間違いの喜劇 わくわくステージ鑑賞及びわくわく解説見学	<p>中学生の団体鑑賞であるわくわくステージの様子を見学させていただいた。当初立ち見と伺っていたのだが、職員の方々のご厚意で補助席に座って観劇させていただいた。演目がアドリブ性に富んだ楽しいものであったせいか、中学生たちは終始楽しそうに集中して観劇している様子であった。また、昨日のゲネプロとは異なり、観客が入ったため俳優たちのテンションも高く、キャラクターの濃い人物の登場した際には大きな受けもあり、劇場全体が一体となって舞台が進行していく様子を肌で感じる事が出来た。終演後のわくわく解説では、使用された大道具の仕掛けや舞台機構などの説明が舞台進行と演出の方からなされ、中学生たちは手品の種明かしを見るように興味深く聞いている様子がうかがえた。</p>
山本さんによる世界の劇場、海外公演制作について	<p>シアトル公演「さらって行ってよピーターパン (Can you still fly, Peter Pan?)」に携われた山本さんから、海外公演を行う上での実際の手順や苦労話などについてうかがった。また、文化庁の研修員として80日間フランスに留学されていた経験のお話についても伺った。</p>
バックステージツアーの続編と舞台技術学校の授業見学	<p>初日に見学することの出来なかった舞台上やキャットウォーク、衣装室の案内をして頂いた。舞台上や衣装室では、舞台美術の繊細なデザインや様々な種類別に収納</p>

	<p>された沢山の衣装を間近に見ることができわくわくしたのに対し、キャットウォーク見学で舞台の上部に上ったときには、緞帳やバトンなど舞台の頭上には重い物がたくさんつるされていてとても危険であることを再確認し身の引き締まる思いがした。</p>
--	--

【5日目 10月12日(土)】

一般公演初日 会場準備	<p>いよいよ一般公演初日を迎えるに当たって、私たち実習生も劇団側としてお手伝いさせて頂くため、チラシの最終挟み込み作業や劇場設営やトイレ位置の確認などを行った。</p>
劇団公演「間違いの喜劇」 公演時	<p>開場時、私はチケットのもぎりを担当させて頂いた。普段はチケットをもぎってもらう側なのだが、今回はもぎる側になってみて、次から次へとやってくるチケットを休む間もなくスムーズにもぎっていく作業は思っていた以上に大変な作業だった。この日のお客さんの中には電動車いすで来られた方がおり、通常の入り口からでは客席に行けないため裏口を通して誘導するという処置が執られた。このように、時と場合によって臨機応変な対応が要求されるということも体験できた。開演後はまた観劇させていただいたので、今回私たちは「間違いの喜劇」を計3回も見せて頂けた。しかも、ゲネプロ、わくわくステージ、一般公演初日と観客席の空気が全く違う環境の元で見せて頂けたので、観客によって舞台の雰囲気は変わるのだと言うことを実際に体験することができて嬉しく感じた。終演後は、帰るお客さんにアンケートへの協力を呼びかけ、最終確認をして無事に初日が終わった。</p>
整理作業 職員の方々への挨拶	<p>実習終了時刻までの間、次回公演の紙に印刷されたままのチケットを一枚一枚ばらばらにするという作業のお手伝いをさせて頂いた。このような地道な作業も機械ではなく人の手によって行われていることを知った。最後は、館長及び職員の方々に、5日間お忙しい中お世話になったお礼と感想を述べさせて頂き、インターンシップ終了となった。</p>



<p>演劇・舞台技術学校授業参加（別役実先生の特別講義）</p>	<p>インターン終了後、尾西さんのご厚意で希望者は特別に演劇・舞台技術学校授業（別役実先生の特別講義）に参加させていただけることになったので、私も参加させて頂いた。別役先生の講義内容は、現代の情報化社会における演劇の位置についてであった。演劇＝情報手段と考えると、演劇はそれを観て感動をともにした人々＝観客（文化）が、それを観ていない人に伝えることによって波状的に広まる文化財である。（文化伝達）欠点としては、映画やテレビ、ラジオのように一度に多くの人に伝達することが出来ない、伝達人数に限りがあるということが挙げられる。しかし、演劇固有の舞台と観客の一体化という「体験感」こそが、情報化社会の中で重要な要素を担ってくるのではないか。つまり、出来事が「体験感」なしに次々と過ぎ去っていってしまうと、年月の過ぎるのがとても早く感じる。故に、こうした肌と肌での伝わりあいといった演劇特有の性質が、人と人との生のつながりが希薄になっている現代の情報化社会に豊かさを与え、人間の総合力を育てるという一端を担うといえる。以上のような趣旨のお話であった。別役実さんの講義を受けさせて頂いたというとても貴重な体験をさせて頂き非常に嬉しく感じた。</p>
----------------------------------	---

・インターンシップを終えて学んだこと、感じたこと、印象に残ったこと(具体的に)

バックステージツアーでは、舞台というのは大きくて重いもの(背景絵やバトン、照明器具など)を扱うので一歩間違えれば命の危険に晒される、非常に緊張感を要する現場なのだとこのことを初めて知った。例えば、セリについても今までに色々な劇場で事故で何人もの死亡者が出たという事実を知った。それを踏まえていかに危険を回避できるかという機構改革が日々研究されているという事も知った。舞台上では設営が行われており見学することができなかったの、代わりにロビーで音響や照明の細かい器具を実際手にとって触らせてもらい、説明していただいた。その説明の中で最も印象に残ったのは、音響・照明それぞれの業界は今まさに過渡期にあるというお話だった。音響界では、これまで劇場のワイヤレスマイクで非常に質の良い800MHz帯を使用していたそうなのだが、ソフトバンクの孫社長がこれに目をつけ買い取ったため(プラチナバンド)、現在の音響界では別の帯を使用しなければならなくなったようだ。また、照明界では近年のLEDライトの普及により、コストが削減できるようになった分、その弊害も存在するという。開幕前に客電を徐々にフェードアウトしていきたい時、従来の照明であれば明かりがだんだん小さくなっていき最後もすっと消えるのだが、LEDの場合はどうして

も最後に明かりが完全になくなるとき、その消え方が滑らかにいかず、ポンッと急に消えてしまふのだそう。また、近年では機材が軽量化されつつあることを背景に、女性の技術者が増えてきているといった傾向も見られるようだ。こうした舞台業界の実際の現場のお話を身近に聞いたことも私にとっていい経験となった。

事業企画・劇場制作については、「企画の仕事は、個性あふれるラインナップ+貸館による客のバラエティ+収益のバランスが重要だ」と話された田房さんの言葉が印象に残った。ピッコロ劇場で上演される演目の上演形態は主に3種類に分けられる。1つ目は全ての費用をピッコロ劇場側が負担する主催公演、2つ目はホールを無料で貸し出し、チケット売り上げが公演を持ち込んだ劇団側に納められる共催公演、そして3つ目は発表の場を地域の団体に貸し出す貸館である。このように様々な上演形態の公演を持つことによってバラエティに富んだラインナップができあがるのだが、これではピッコロシアターという劇場・劇団の個性がいつまでたっても形成されないといった問題点もあるという。また、今年度から始まった新しい企画に「シアタースタート」というものがある。普段は育児に追われ、なかなか劇場に立ち入ることの少ない母親たちのために、0歳児とその母親と一緒に演劇を楽しめる場を作ろうという思いをもとに始まったものだ。これは、育児の悩みを抱えている母親の交流の場の提供と言うことだけでなく、子供たちにも0歳から質の高い演劇に触れさせるといった情操教育の一環をも担っているとも言える。

演劇学校の説明の中では、同じく県立の劇団を持つ静岡県の静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center : SPAC）との運営方針の違いについて伺った。ピッコロシアターでは先述したように地域住民に貸館を積極的に行い、演劇・舞台美術学校もプロではなくアマチュア向けに開校されているというように地域住民の演劇活動への参加に主眼に置いているのに対し、SPACでは貸館は行っておらず専用の劇場としてプロとアマチュアの間で明確な境界線を引くべきであるという鈴木忠氏の方針の下に成り立っている。そのため、ピッコロシアターとは違い、静岡県民との間に距離が生じているという事実が存在する。だが、これはどちらが正しいとは断言できる問題ではなく、私個人としてはそれぞれ方針の異なった公立劇場が全国に存在することはより有意義なことのように思う。また、海外では俳優はプロとアマチュアにはっきり区別され、さらにプロの中でもランキングがあるのに対し、日本ではその境界がはっきりしておらず序列もないという現状とも重なって興味深く感じた。

世界の劇場、海外公演制作についての話の中で、フランスの演劇は文化的・哲学的な演劇とそれ以外の商業的なものとの2つにはっきりと分かれるという。文化的・哲学的な演劇は助成金が出て公演が行われるが、観客はほとんど入らないという。助成金をもらって行っているのだから、客が入らなければ行く意味が無いし、そんなものは税金の無駄遣いだと非難の対象になるのが日本では普通だが、フランスの場合は違う。フランス人は、文化的・哲学的な演劇は内容が難しいのだから客が入らなくて当然であるし、反対に助成金があるからこそそのような演劇を行うことが出来るのであるし、実験的なことだって出来るという考え方が面白い。私は、このようなフランス的な発想に驚いたが、同時に感銘を受けた。海外の方が日本よりも合理的な考え

方をするのだと言うことも身をもって知らされた。先述したシアトル公演の際も、アメリカの労働組合(ユニオン)の決まりの厳しさに日本との感覚の違いに戸惑ったというお話を伺った。アメリカ人はどんなに作業の途中であっても、休みの時間になれば中断して休みを取る。これは休みを取らないことによって生じた疲労が事故の元になるということを考慮するからである。また、俳優は演技以外の一切の雑務をしてはいけない(本番前に雑務で疲れていてはいけない＝演技に集中するのが俳優の仕事である) というように職務の分担がはっきりしている。日本のように「上の人がまだ仕事をしているのに自分だけ上がっては悪い」という意識は存在しないのである。また、ロシアでは演劇学校を出た俳優をプロ、それ以外はアマチュアとはっきり区分するそうだ。日本では我流の教え方が多く、その区分も曖昧なものになっていると言える。

#### ・公共劇場・劇団としてのピッコロシアター

インターンシップを終えて、やはり最も強く意識させられたのはピッコロシアターが公共劇場・劇団であるが故のメリット・デメリットである。様々な職員の方々からのお話を伺っていても、やはり共通するのはこの点についての問題意識であるように感じた。そこで、ここでは僭越ながら私の思い描く理想の公共劇場・劇団としてのピッコロシアターの姿を述べさせていただきたいと思う。まず、理想の公共劇場というのは、一種の「公園」のようなものだと考える。地域の人々が気軽に利用でき、みんなで大切に守り、人と人とが交流できる機会を与えてくれる場所。しかも、それは子供たちの成長に深く関わる場でもある。公園で遊んだことのない子供はいないだろう。公園というのは子供の成長に欠かせない場所という風に広く世間に認識されている。また、子供の情操教育の一環として、美術館や博物館に連れて行く親は多い。が、しかし、劇場に足を運ぶ親はさほど多くないだろう。演劇・クラシックコンサートなどと言うのは美術館や博物館よりは値が張ってしまうというデメリットはあるが、より多くの感覚神経を使って体感することのできる劇場空間はそれだけの価値があると言える。また、体感したことは記憶にも残りやすい。しかし、世間一般の感覚からすると劇場というのは、子供の教育にとって重要な役割を担う場であるという認識はまだまだ薄い。演劇には答えがない。間違いも無い。だから、想像力が育まれる。想像力というのは肯定から始まる。(「YES AND・・・」)つまり、劇場は相手を受け入れることのできる人間が育て、大げさに言えば世界平和に寄与できるかもしれないという大きな可能性を秘めているにもかかわらず……。職員の方々のお話から、ピッコロシアターではわくわくステージやファミリー劇場、小学校への巡演やシアタースタート等々、子供を対象とした公演を数多く行っていることを伺った。このように子供の成長にとって劇場が重要な役割を担うのだという意識を世間一般の人々に知らしめる、その先駆けとしてピッコロシアターがますます活躍されることを願っている。そして、兵庫県ほど演劇活動を重要視していない他府県にも、演劇及び劇場が子供の成長にとって重要な役割を担うのだという意識を広めていく一翼を担ってほしいと思うのである。一方、公共劇団のあり方としては、公共施設の最大の目的というのはやはり地域の人々が気持ちよく使用できることであろうから、そのための地域貢献、いやむしろ地域の人々と共に作っていくという姿勢が最も重要

であるだろう。そのためにピッコロ劇団としての個性が育たないとしても、それはそれでその時代時代の地域の色に染まれる、透明さこそを新たな個性としてアピールしていけば良いのではないかと思うのである。

・終わりに

今回のインターンシップは私にとって本当にいい経験になった。今までは漠然としか舞台現場の仕事を知らなかったが、実際に現在舞台の仕事に携わっておられる方々の生の声が聞け、現場の様子も目で見られたことで、舞台がますます好きになった気がした。そして、私自身も将来は舞台に携わる仕事がしたいという明確な意思が芽生えた。本当に今回お世話になったピッコロシアターの方々には感謝の気持ちでいっぱいである。お忙しい中、私たちのインターンシップにつきあってくださり本当にありがとうございました。

### 3 美術関係

#### 3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ

文学研究科教授 藤岡 穰

報告者が開講している東洋美術史演習「仏教美術の理論と実践」（通年・集中）は、主に日本・東洋美術史を専攻する院生を対象に、美術作品のフィールド調査などを不定期に実施し、調査研究の実践力を身につけることを目的としている。また、美術研究のうえでは大学などの研究機関と両輪をなす、博物館施設におけるインターンシップへの参加も奨励しているが、その受け皿として利用させていただいているのが大阪市立美術館のインターンシップである。

2013年度には1人の院生が応募し、採用された。

大阪市立美術館のインターン（研修生）制度は、2008年度に創設されたもので、近畿一円の大学院で美術史を専攻する学生若干名のインターンを受け入れ、学芸員育成のための研修を行っておられる。以下に、その募集要項を抜粋する。

#### 大阪市立美術館インターンシップ制度

##### 1 趣旨

大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン（研修生）を募集します。

##### 2 研修内容

平常展、特別展を中心に学芸業務全般に関して、当館学芸員と共に携わっていただきます。

※ 研修内容の詳細については別紙をご参照ください。

##### 3 受入対象

大学院在学中もしくは修了者で、美術史や美術・文化に関連する分野を専攻する者、または同程度の能力・経験を有する者。

##### 4 受入人数

若干名

##### 5 研修場所 / 期間

大阪市立美術館ほか 2013年5月中旬～2014年3月31日 [10ヶ月程度]

##### 6 研修日 / 時間

原則として、1～2週に1日程度

※ 研修日については、相談に応じます。

※ なお担当する業務の進捗状況により、連続する場合があります。

9:30～17:00 [昼休み1時間程度]

##### 7 受入条件

(1) インターンの報酬は無償とします。

(2) 交通費/食費は支給しません。

(3) 傷害保険に加入していただきます(費用は美術館で負担します)。

(4) 当館とインターンとの間で誓約書を交わしていただきます。

## 8 応募方法等

### (1)応募書類

◇ エントリーシート

◇ 小論文 課題「大阪市立美術館インターンシップで学びたいこと」1200 字程度

(2)応募締切 2013 年 4 月 10 日 必着

(3)書類の提出 封筒に「インターンシップ制度応募書類在中」と朱書し、下記宛先に送付してください。

大阪市立美術館

〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町 1-82

(4)選考と通知 応募書類と面接により選考します。

一次審査[書類選考] 結果通知 4 月中旬

二次審査[面接] 4 月下旬

最終結果 通知 5 月上旬

## 9 修了証 規定時間[150 時間以上]、研修を修了した方に対し、修了証を交付します。

なお、2012 年度の研修内容の詳細と担当学芸員は以下の予定であった。

A 中国書画 (担当 弓野隆之)

B 中・近世絵画 (担当 知念理)

C 近世・近代絵画 (担当 秋田達也)

D 工芸 (担当 守屋雅史)

E 近世～近代美術工芸 (担当・土井久美子)

F 仏教彫刻・工芸 (担当 齋藤龍一)

文学研究科からは、このうち C に応募し、採用していただいた。予定されていた内容は、日本の近世絵画 (主に 18 世紀以降) や近代日本画に関する展示の準備などを担当学芸員とともに行う。作品に関する基本的な知識を有し、興味を持って諸作業に臨める人が望ましい。

大阪市立美術館のインターンは、一人の学芸員のもとでその補助業務を担当することを原則とし、特別展や常設展、普及事業など、各学芸員がその年度に担当する仕事に共に携わる。ほぼ 1 年間にわたり継続的に行われる研修は、それゆえ責任も大きく、大学院生にとってもかなりの負担になる。しかし、それぞれの学芸員の方のご配慮 (大変なご負担) により、単に補助的な業務に終始するのではなく、美術史研究のうでも有意義な、本当の意味での育成をさせていただいており、とても貴重な経験の場となっている。この場を借りて、ご担当の学芸員の方々に感謝申し上げたい。

### 3.1 「大阪市立美術館インターンシップで学んだこと」

〔学生からの報告〕

大学院文学研究科 博士後期課程 藤本 真名美

今回のインターンシップ、特に常設展の企画・展示を通じて学んだのは、作品を生かすも殺すも、学芸員の腕にかかっているということである。

作品の保存管理は最も重要である。収蔵庫の温湿度管理はもちろんのこと、特に展示・撤収にかかる作品の移動や設置の際に注意しなければならない。作業は基本的に専門の運送業者が担当するが、学芸員も作業に立ち会い、業者に指示しなければならない。作品に対し常に責任を負っている。そこで出来る限り安全な方法で作業を進められるよう、的確な指示が必要となる。秋田学芸員からは、他人に気を遣って急ぐ必要はないから、とにかく作品に注意し、焦らず作業を進めるようにと教わった。長年受け継がれてきた作品を傷めないように展示するのは緊張を伴う作業であったが、学芸員という仕事の責任の重大さを感じることができた。

また、展示によって作品のもつ魅力を最大限に生かすことも学芸員の腕の見せ所である。今回携わらせていただいた二つの常設展では、それぞれ自ら考えたテーマに沿って作品を選定した。最初の展示ではバランスの取れた展示となったものの、二度目の展示では、画題や画風、色調、サイズ等で統一感をもたせられなかった。展覧会を企画する際は、幅広い作品（常設展の場合、館蔵品）について地道な調査研究によって熟知した上で、具体的な展示イメージを想像しながら、作品を選定しなければならない。まとまったコンセプトをもたせつつ、見た目にも美しい展示をするのは、想像以上に困難であった。学芸員は、有意義な展示テーマを考えることのできる研究能力に加え、展示の際に作品の魅力を最大限に引き出せるような美的センスも問われる。今回の失敗に学んで、作品の画題、画風、色調、サイズ等のバランス、作品の配置等にこだわり、調和の取れた展示を心掛けていきたい。さらに、作品解説等でも作品の魅力を伝えられるように努めなければならない。漢字に振るルビの基準や、画家情報、作品記述など、鑑賞者にとって本当に必要な情報を提供できるよう配慮する必要があることに気付かされた。日頃から来館者の客層を把握した上で、彼らの視点に立って展示企画や作品解説を考えることが重要で、社会ではこうした学芸員が求められていると感じた。

今回インターンシップでこうした学芸業務を経験させていただいたおかげで、学芸員として就職することができました。インターンシップで作品の扱い方や展示方法を学んだ経験は、実際に現在の職場でも活かされています。学芸員として、また、社会人の先輩として、いつもの確なアドバイスをくださり、見守っていただきました秋田学芸員、インターンシップという貴重な機会を与えてくださった美術館の皆様、本当に有難うございました。この度インターンシップで学ばせていただいたことを忘れずに、今後も頑張っ参ります。

## 4 映画関係

### 4.0 2013年度インターンシップ概要

文学研究科 教授 上倉 庸敬

平成25年度も、東映京都撮影所のご好意によって、美学・芸術学講義（該年度の講義題目「映画序説－映画研究の理論と方法－」）および美学・芸術学演習（該年度の講義題目「大映という撮影所システムと映画作品」）で、インターンシップ参加者の募集をおこなった。ただし東映京都撮影所は「せっかくインターンシップに参加いただくならば、劇場公開用映画1篇あるいは連続テレビ劇映画1セット（1時間番組2週分）をご経験願いたい」というご要望で、そのためには2週間から4週間が必要であるため、希望者がいても実現することは数年に1度である。しかし今年度は、昨年度につづいてインターンシップが実現し、しかも単年度で4名という、これまでにない多数の参加者を得た。そのうちの3名は、大阪大学21世紀懐徳堂が近年、コミュニケーションデザイン・センターと石橋商店街の協力を得て実施している「イシバシ・ハンダイ映画祭」の作品応募者であることは、特記しておいてよいだろうと思う。

今年度の希望者たちは皆、あらかじめ撮影所と熱心に相談の上、報告書のとおり1月を越えるインターンシップに勤勉また積極的に参加した。それぞれが携わった作品はどれも、撮影所にとって手を抜けないものであり、参加者の希望は十分に報いられたろうと推量する。実際にどれほどの得るものがあったかは、以下の報告書をお読みいただきたい。

なによりも一言しておきたい。報告書からも推察できると思うが、撮影所の担当者が参加者に対して、たえず教育上の濃やかな配慮を重ねてくださり、終了に当たっては行き届いたお言葉までたまわったことは、まことに感謝に耐えない。

八巻高之君の報告については、これをこのまま提出することに指導教員として一瞬の逡巡があったことは述べておかねばならない。人間関係に由来するところが多い事柄を一方的に報告することは、事実の正確な把握には至らず、受け入れてくださった東映京都撮影所に失礼だろうと思ったからである。映画の撮影現場は、たとえば黒澤明監督『赤ひげ』のよく知られたエピソードのように、開かれることのない薬箱にも薬を入れておく配慮が求められる。その配慮に、これで十分というレベルはない。さらにどのような配慮が重ねられねばならないかが、その場のスタッフそれぞれに求められる。わたくしの経験では、テストが繰り返されるうちに冷めてしまった目の前のヤキトリ（わたくしはそのとき焼き鳥屋の客であった）が「では、ホンバン」の声とともに、温かく蒸気の立ちのぼるヤキトリに、さっと取り替えられたのである。そうした配慮に思い至らなかった八巻君を、最後までそれこそご配慮くださったことに、東映京都撮影所の現場スタッフの方々も含めて、皆さまに御礼申しあげたい。その上でなお、インターンシップ参加者が、そのとき、その場でどう感じ、そのあとで、どのように自分の内部を整理していったか、その主観に寄り添った八巻君の報告を、一字の修正も加えずに掲載することについて、ご寛恕いただきたいと願う次第である。このことの教育上の意義をわたくしは認めており、申すまでもなく、それに関するすべての責任は、指導教員であるわたくし一個にある。そのことも、はっきり申し述べておかねばならぬ。



平成25年度インターンシップの経過は概略つぎのとおりであった。

1. 年度初めに以下のような募集ちらしを配布した。

## 東映京都撮影所 インターンシップ募集

東映京都撮影所のご好意でインターンシップ希望者を募集します。

1. 内容 映画撮影現場業務（製作、撮影、録音など。広報などのデスクワークはありません。）
2. 期間 今年度（ただし2014年3月まで）のあいだの、ほぼ一月間。実際の日付は、撮影所と応募者が相談して、決定。
3. 応募資格 学生傷害保険の加入者で、以下のいずれかの者。
  - 1) 美学・芸術学の講義ないし演習の受講生。
  - 2) 撮影所の仕事に特に強い関心があつて、身体頑健な阪大学生。
    - ◆ 1) による合格者は、就業態度を上記授業の成績に反映します。
4. 応募方法
  - 1) 応募用紙は実践教育 A 棟、上倉研究室へ取りに来てください。
  - 2) 提出先は、上倉研究室。締切は、実質、随時。
5. 審査方法
  - 1) 第1次 学内書類審査と面接。
  - 2) 第2次 東映京都撮影所書類審査と面接。
  - 3) 合格者には個人あて連絡します。

問い合わせ先

文学研究科 芸術学講座 上倉庸敬

[kamikura@let.osaka-u.ac.jp](mailto:kamikura@let.osaka-u.ac.jp)

090-8527-4070

2. 希望者に、自分の連絡先と出願の志望理由を提出してもらった。東映京都撮影所の下戸聡製作課長とつねに連絡を取り合つて話し合い、連絡先・志望理由書を手渡して、今後の細部は、当人と直接、話し合つてもらうこととした。（東映京都撮影所と交わす、その他の「インターンシップ実習生派遣に関する協定書（秘密保持、普通傷害保険・個人賠償責任保険・学生教育研究災害傷害保険などへの加入等についての協定）」「誓約書」「出願者データフォーム」「実習先提出票」「実習予定表および出勤簿」などの書類・書式は、多少の変化はあるものの、原則、例年のとおりと承知している。）

3. 終了後、参加者から報告を受けた。

以上。

## 4.1 インターンシップ報告書

〔学生からの報告〕

文学部4回生 美学専修 大堀 知広

映画が実際にどんな風につくられているのかを知りたい。私は約一ヶ月間、京都・太秦にある東映株式会社の京都撮影所で、インターンとして撮影現場に参加する機会に恵まれた。できる限り長い時間撮影に参加できるように、文化庁の支援を受けて撮影所の近くの宿から毎日通えることになった。様々な部署の中から、私は製作課のインターンとして配属され、ラインプロデューサーと製作進行の先輩方の下で働くことになった。製作課とは、作品の予算を管理し、ロケ交渉や撮影のスケジュール管理や、現場で生じる様々な仕事に至るまで常に気を配らなければならない部署である。

このインターンシップを通して実感したのは、映画やテレビドラマなど映像作品を作ることがどれだけ大変なのかということだ。本当に多くの人々の力が結集されて映像作品は生み出されている。映画を見る・楽しむ立場にとっては、スクリーンや画面を通して映し出される映像、つまりフレームの中の世界がすべてだ。しかしフレームの外、その舞台裏では、演出、撮影、照明、録音、美術、小道具、衣装などのそれぞれの部署のスタッフが集まり、それぞれの仕事が組み合わされ、その中から最善の材料が選択されていくことが積み重なり、映画は作られるのだと感じた。

どこからどこまでがカメラに収まっているのか、最初全く分からなかった私は、現場に慣れていくうちに、しだいにその境界線を意識するようになった。役者の方から、「ここからは映るけど、ここまでは大丈夫だから。」と目に見えない境界線を教えていただいた時、カメラに切り取られる「絵」というものを強く意識した。その中では背景のセットや通りがかる人々に至るまで、すべて計算され「作られていく」。カットごとにカメラの向きが変わるたび、スタッフの皆が動き回って再び絵をつくっていく。

特に殺陣のシーンでは、殺陣師の方がセットの構造やカメラ位置を考慮した上で、すべての役者さんの動きをつけていく。殺陣師の方も役者の方々もどんな動きなら、どんなカメラワークなら芝居がよく映えるかを熟知していた。長年時代劇で刀を振るってきた役者の方々の演技を初めて間近で見た時は、感動で鳥肌が立ったことを覚えている。

もう一つ学んだことは、それぞれの部署のスタッフ全員がいかに効率よく動き、仕事をしているかということだ。決められた時間の中で最大限の力を発揮するには、どれだけ無駄な時間を作らないかが大切だった。特に製作課は、常に全体を見ながら現場で起こる様々なことを見越して準備を整え、動き回ることが求められた。関わっている人が多ければ多いほど、全体がひとつになって動いていくのはそれだけ大変なことである。無駄なく現場が回っていくことは、スタッフの人々が円滑に仕事を進め、納得のいく作品作りをする上で非常に重要なことだと分かった。すべては良い作品を作り上げるため、その為ならスタッフは監督からのあらゆる指示に応える。私は先輩やスタッフの方々の姿を見て、プロとして映画を作るということを初めて

目の当たりにした。

誰かを楽しませる、感動させる華やかなエンターテインメントの世界の裏側は、想像以上に厳しい世界だ。そして、多くの人々の肉体労働の結集である。映画は、多くの人々が集まってそれぞれの技術や考えによって作り上げられていく。そして、とにかく体を動かすのだ。深夜 12 時を超える撮影もしばしばあり、とにかく忍耐力が必要だった。ひとつひとつ丁寧に仕事を教えてもらうのではなく、とにかく先輩の仕事ぶりを見て、見よう見まねで自分でやってみる。間違っていたら怒られる、その積み重ねであった。

思い返してみれば現場では、毎日が初めてのことばかりで、数え切れないほどの失敗をしたと思う。その中で、とにかく悩むよりも次にやるべきことのためにとにかく動くよう必死になった。先回りして自分が何をすべきか考えること、躊躇わずに動くこと。失敗して落ち込んだ時は、先輩やスタッフや役者の方々の姿を見て自分を奮い立たせた。そうやって自分がやった仕事に対して、「ありがとう」という言葉をかけてもらった時、そのたった一言にどれだけ救われたか分からない。必死に動き回っている中で、声をかけてもらったり、注意してもらったりすることの有り難さを知った。小さな気遣いひとつで、仕事をする環境や雰囲気は改善する。協力し合わなければ映画は作れないのだ。

映画は生身の人間が作り出している。それはすべて「作られた」もので、虚構の世界なのだと実感した。そんな虚構の世界に、こんなにも多くのプロの人々が、大変な時間と技術と努力を注ぎ込んで働いている。そこに注ぎ込まれる情熱が多ければ多いほど、映画は人の心を動かしていくのだと思った。映画作りを仕事にする世界、私はきっとまだそのほんの一部しか見ていないかもしれないが、この一ヶ月間で言葉では言い尽くせないほど多くのことを学ぶことができたと思う。

## 4.2 東映京都撮影所インターンシップ報告書

〔学生からの報告〕

文学部4回生 哲学思想文化学専修 八巻 高之

私は昨年11月に、2週間ほど東映京都撮影所のインターンシップに参加させていただきました。撮影所の制作課という部署に配属され、3人の先輩とともに正月のドラマスペシャルの製作に携わりました。今回のレポートでは、昨年11月を振り返って、今の自分が思うことをできるだけ率直にお伝えしたいと思います。

まず、インターン直後に書いた短文レポートで、今回の経験の概要をお伝えしたいと思います。以下は、このインターンシップを管理していただいた東映京都撮影所制作課の下戸さんという方に、インターンシップが終わって二日ほど経ってメールで提出した400字のレポートからの抜粋です。

『とにかく、現場の厳しさにもまれた2週間だった。(中略)思った以上に慌ただしい現場で、インターンシップ前にはほとんど新品だった私の靴が、たったの一週間でボロボロの穴あき靴に変わってしまったほどだった。任された仕事を満足にできず、毎日、怒鳴られ、小突かれ、呆れられた。しかし、そうやって厳しく叱咤される中で、現場に必要なことを先回りして自分で考える癖がついた。自分なりに試行錯誤を行い、改善点を探す姿勢が身についた。今回のインターンシップでは「映像制作の楽しさ」なんて感じられる余裕は無かった。それでも、自分の視点で考え、努力する大切さを知れたことは大きな収穫だったと思う。』

今になって考えると、お世話になっておいて、「映像制作の楽しさ」など分からなかったとネガティブなことを言うのは、かなり失礼だったかもしれません。しかし、インターンシップの終盤に、このように私の元気ややる気も息切れしてしまっていたのは事実でした。実際、インターンシップが終わり、久しぶりに大学の部活に顔を出すと、「八巻さん、なんだか弱気になって元気がなくなりましたね」と後輩に言われたほどです。しばらくはこの経験をあまり思い出したくもなかったため、レポートの提出が遅れてしまいました。

どうしてこうなってしまったのか。やはり、私自身の意識にまだまだ甘いところがあったのだと今は思います。インターン中は、ずっと自分なりにしっかりやろうと頑張っている「つもり」になっていました。しかし、不器用な私の力不足から怒られ、先輩との関係も上手くいかず、ずっと空回りしているうちに私は精神的に疲弊してしまいました。

終了後に、過去のインターン生の山本さんのレポートを読み返すと、自分との意識の持ち方の違いに衝撃を受けました。どんなことでもポジティブに捉えられており、現場の人とのふれあいの中で新しい発見を繰り返している状景が想像され、自分の経験と比較し落ち込んでしまったりもしました。そりゃこんないい人なら現場で上手くやれるだろうな、と羨ましく思いました。

これは泣き言ですが、上司になった先輩がとても厳しかったことも私にとってはつらい要因でした。3人の先輩を仮に、バラエティ制作会社から出向してきたAさん、東映関連会社から派遣されたBさん、東映社員のCさんとします。Aさんは、本当に恐ろしかったです。機材の管理に不備があり、腹を蹴られたこともありました。その時には、いっそ蹴り返してやろうか、それとも、倒れこんで、救急車を呼んでやって、大事にしてやろうか、などと、妙に殺意を膨らませてしまったことを覚えています。また、とにかく怒鳴りまくるタイプの方だったのもたまりませんでした。私の仕事に至らない点があり、怒鳴られることは全く構わないことなのですが、知らないことを知っている前提で最初から怒鳴ってくるのには本当に苦しみました。この方が、自分の会社の部下のADを一年間に13人辞めさせた、と豪語しているのを聞いたときには、そりゃそうだよな、と妙に納得してしまいました。こんな人のもとなら、大抵の若者は一カ月持たないと思います。ただ、仕事に関しては本当に優秀な方で、他の部署の方からも一目置かれていました。やはり、厳しいテレビのバラエティの世界で生き残ってこられた方だったので、東映の撮影所の方とはかなり雰囲気が違っていました。

そういえば、この方とは、最終日にコーヒーポットをめぐる諍いを起こしてしまいました。

インターンシップの終盤、私は先輩との関係がいやになってきてしまい、「反抗的」な態度を取り始めていたそうです。例えば、分からないことを聞かれたら、分からないと聞きなおって答えるなどでした。その行動は、自分としては、教えてもらってもいない業界の知識を知っている前提として最初から怒鳴られることに嫌気が差したためでした。これについても、今振り返れば、知らないことがあれば、謙虚な態度で教えるべきだったと思います。しかし、当時の私は、自分のつまらないプライドに気を取られ、また、いつまでたっても成果が上がらず、先輩たちからは使えないクズ扱いされることに本当に腹が立ってしまっていました。最後の3日間は、終わりが見えてきたこともあり、少し開き直ってしまっていました。

最終日は、撮影所内でのスタジオ撮影でした。早朝に魔法瓶に入れたコーヒーがこの日は昼過ぎになくなりかけており、私は、控室に戻って新しいコーヒーを淹れなおすことになりました。何かの別の用事を頼まれていたため、早急にスタジオにも戻らなくてはなりません。そのため、コーヒーメーカーでコーヒーを作り、機械に付属の瓶でそのままコーヒーを持っていくことにしました。というのも、私は、そのコーヒーメーカーの付属瓶が魔法瓶だと考えたためです。部屋にコーヒーメーカーは二つあり、一方の瓶はガラス製で、もう一方の瓶はガラス瓶よりさらに容量の大きいステンレス製でした。ガラス瓶が付属している方のコーヒーメーカーは、ガラス瓶の下に電熱式のヒーターがあり、これで、できたコーヒーの保温ができるようになっているようでした。一方、ステンレス製の瓶の方は、ガラス瓶よりサイズが大きいにもかかわらず、電熱式のヒーターなどは見当たりませんでした。このことから、私は、ステンレス製の瓶は、魔法瓶だろうと考えていました。容量が大きいにもかかわらず保温の仕組みがなければ、飲みきる前にコーヒーが冷めてしまうからです。そう考えて、少しぬるくなったコーヒーが入っている現場の魔法瓶とは別に、私は魔法瓶と考えられるコーヒーメーカーに付属のポットをできたてのコーヒーで満たし、現場に持っていくことにしました。この控室はこの

撮影組専用の場所だったので、瓶を持って行って誰か他の人に迷惑がかかることはありません。

しかし、撮影があらかた終わり、片付けの準備に入ったころ、私は制作会社からの出向の先輩Aに呼び出されました。魔法瓶に残ったわずかなコーヒーをコップに入れ、私に飲むように言いました。言われるがままに飲みました。「冷たくなるとるやろ。なんでこんなやつに入れてきたんや」と聞かれました。「いや、量が残りわずかになったから温度が下がったんじゃないですか。」と私は言いました。急に怒鳴り口調になり「じゃ知らんからな。まあお前ん中では魔法瓶なんちゃうかいや。俺はこれ魔法瓶や言うやつは頭おかしいと思うけどな！」というようなことを言われました。私は、いや、本当にこれは魔法瓶だと思うんだけどな、と一人思いました。

その後、備品を控室と倉庫に片付けました。例のコーヒーマーカーを倉庫に片づけている途中、ふと、そのコーヒーマーカーが本当に魔法瓶だったのか不安に思いました。全ての撮影が終わり、時間に少し余裕があったときだったため、私は自分のスマホでそのコーヒーマーカーの型番をちょっとだけ調べることになりました。結果、そのコーヒーマーカーのポットはやはり魔法瓶だということが分かりました。「よかった。これで大丈夫だ」と、私は倉庫で一人安心しました。

しかし、そのあと、私はまた先輩方二人ABに呼び出されました。先輩Bから、まず「お前、何であんなポットで持ってきたんや」と問われました。私は、「あれが魔法瓶だと思ったからです」と答えました。大きさとヒーターの有無の関係から考えたことも付け足したように思います。ネットで確認したことは言いませんでした。

「冷たくなってたのは？」

「量が残り少なかったので、温度が下がってしまったんじゃないでしょうか...」

答えた通りのこととお話ししました。

「そんなことは知るとるわ。誰だって知ってる。魔法瓶やろうがそうじゃなからうが、あんなあ、先輩が怒ってるんやから、口答えすんなや。」

「...すみません。」

「すみませんじゃないやろうが！」

じゃあどうしろというんだよ、と私は思いました。最近、こういうことが続いていたからです。当初、私は、「現場で叱られたときは、とりあえず、『はい、すみません！』と元気よく謝るように」と教えられました。それにしがたって、前半は先輩方の前でそうふるまうようにしました。しかし、そのうち、すみませんじゃないだろうが、何か理由を言え、と言われるようになりました。そこで、理由も付け加えました。すると、言い訳をするなどと言われるようになりました。正直言って、このループする流れにはうんざりしていました。

「お前と話してるとな、なんかこう、スカッとせえへんわ」

別に先輩の気持ちを爽快にさせるために私は頑張っているんじゃないと思いました。横から、さきほどの先輩Aが割って入ってきました。

「お前な、なんかなめてへんか」

「いえ、なめていません」

「なめてんやろ」

「いえ、そんなことはありません」

少しずつ先輩の語気が強くなりながら、この問答を数回繰り返しました。じりじりと彼が近づいてきました。私は、ああ、これは先輩の中で何かスイッチが入ってしまったな、と思いました。

「なめとったらなァ！いてまうぞコラ！！なあ！？」

いよいよ殴られる、と思った瞬間、もう一方の先輩Bが止めに入りました。

私は、正直殴られることを期待していました。殴られれば殴り返せる。その方がよっぽどお互いにとって爽快だろうと想像していました。

先輩Aは離れたところにいき、スタジオの壁を蹴りました。バシン、バシンという彼がストレスを解消する音が夜の撮影所に響きました。

「お前はこれまで見てきた学生の中で最悪のインターン生や」と先輩Bがおっしゃいました。

これが、私のインターンシップ最終日でした。特に感動的な出来事もなく、ただ単に先輩との関係が最悪になっただけで私のインターンは終わりました。

わざわざ、このコーヒーマーカーの些末な出来事を事細かに書いたのは、この出来事を通して、私の性質の問題点を大まかにお伝えできると思ったからです。すぐに謝ったり、謙虚にいつまでもふるまえる人間ならこんな苦労をしなかったのだらうと思います。どうも私には自分の卑小なプライドを覗かせてしまう癖のようなものがあって、それが、今回の問題につながってしまったように自分では考えています。

頑張っているのですが、焦りのあまり、空回りしてしまう傾向があります。今回のインターンシップでは挫折感にまみれてしまいました。頑張っている「つもり」になっていたのかもしれませんが。しかし、悩んでも悩んでも答えは出ませんでした。私は、現場でイキイキと動ける山本さんのようなインターン生に私になれなかったというだけのこともかもしれません。

このように書くと、まるで、私がインターンシップ中いじめられ通しだったかのようですが、決してそんなことはありません。製作課の先輩二人にはよくご飯をごちそうになっていました。良くしていただいていたと思います。ただ、いつからか歯車が狂ってしまい、このような結果になってしまいました。また、他の部署のスタッフの方からも、いつも本当に良くしていただいていた。決して、私には被害者意識のようなものはありません。お世話になった皆様には、感謝の念を感じています。ただ、結果としてはインターンシップを上手く活かすことができませんでした。そして、いまだ、この問題は私の中で解決できていません。就職しても組織の中で上手くやっていた自信が全くなくなりました。どうしてよいのか、自分でもよくわかっていません。良い報告書とならず申し訳ありませんが、ひとまず、これにて私のインターン体験の報告とさせていただきます。



### 4.3 13年度・東映京都撮影所インターンシップ・報告書

〔学生からの報告〕

大学院文学研究科 博士前期課程 祖川 明子

東映京都撮影所にて、『科捜研の女』の制作に携わった一か月を、改めて振り返ろうと思う。私は制作部に配属された。最初は制作部の役割が全く分からなかったが、次第に為すべきことと心がけなくてはならないことが見えてきた。

制作部の仕事の一つは、外部との対応である。撮影のためには、使用させてもらう建物の所有者から通りすがりの通行人まで、様々な人の理解と協力を得ることが必要である。コミュニケーションスキルの重要性を痛感した。東映がどのような会社であるか、作品の質だけで評価されるのではないのだ。現場に行き、初めて気がついた。

もう一つの仕事は、内部への配慮である。制作部は、スタッフが集中して作品をつくることのできる環境を整えなくてはならない。撮影は体力を使う。いつ、どんな食事を用意するか、そのことがこれほどまでスタッフの士気に影響するものかと驚いた。

制作部が献身的に走り回り、地道な気配りを重ねていくことは、絶対に良い作品に繋がる。時々ではあるが、その手ごたえを感じられることがあり、その時は本当にうれしかった。インターンシップを通して、私は他にも学んだことがある。最初、緊張もあり、びくびくしていた私に、自分を守るためにすぐにあやまることはやめたほうがいいとアドバイスしてくれた人がいた。目が覚めた。堂々とする。自分の意思を臆さず示すこと。曖昧に終わらせないこと。そしてできるかぎり、明るく笑顔でいること。組織の中でどう振る舞うか、大切なことを教えてもらった。

#### 4.4 東映京都撮影所・製作課インターン・体験レポート

〔学生からの報告〕

経済学部3回生 小林 寿樹

今回、私は文学部の教授の推薦から、東映京都撮影所でのインターンを体験させていただきました。私がついた作品は東映ビデオ制作の時代劇であり、期間は11月25日から12月25日まで、そのうち撮影期間は12月10日から12月24日まででした。

部署は製作課に配属され、仕事としては備品の管理、役者さんへのケア、買い出し、各部署の運搬・設置の手伝い、弁当の配布、ロケ撮影での人止めなどをさせていただきました。

11月25日に撮影所に入り、打ち合わせから参加させていただきました。そのまま本読みに入りました。各スタッフの紹介が行われ、そこで大体の人の顔と名前を一致させようと努力しました。私は、製作進行の土井さんのもとで働きました。土井さんはまだ入社1年目であり、「自分もまだ上司に怒られてばかりだから、あまり怒れないけどね。」と言ってました。こちら側としては非常に年が近く春まで大学生だったこともあり、非常に接しやすかったです。準備期間中は、10時イン（時々13時イン）で18時の定時に上がりました。書類の整理や、香盤表の作り方、ロケ地の周辺への挨拶周りやおおび状の作成などをやりました。準備期間から参加させていただいたことで、スタッフの名前などを早くに把握でき、撮影の手伝いに役立てたと思います。またロケ地を見させていただいたり、カメラテストでセットでの撮影の流れを見れたり、クランクイン前に撮影の具体的なイメージをつかめたのは大いに役立ちました。一方で、クランクイン前日は土井さん自身が忙しそうで「すまん。見てる余裕ないから今日は帰って大丈夫だよ。」と言われたのが少しショックでした。

クランクインしてからの仕事はおもに備品の管理やガンガン（炭を使った暖房器具）の管理をしました。クランクイン初日、オープンセットでの撮影で腰まで丈がある長靴を履いて池に浮く落ち葉をとったり、備品を積みこんだ台車を押しながらセットとオープンの間を走ったり、最終的に0時近くまで撮影が押すなど大変でしたがとても楽しかったです。2日目もやはり日をまたぎました。夜食で寿司がでたのにも驚きましたが、それに対してスタッフが「もう飽きたよ。」と愚痴をこぼすのにも驚きました。ロケでは、主演の男優、女優それぞれに話しかけられ、すこしお話ができたのもよかったです。主演男優やスタッフの人に「映画監督になりたいです。」と言ったら「へえ。じゃあ、なったら使ってよ。」と言われました。メイキングの人は真摯にアドバイスしてくれてありがたかったです。

もちろん楽しいことだけでなく大変なこともありました。2日間のロケの撮影が終わって撮休日になるはずが雨の中、ロケ先でゴミ拾いをするようになってしまい、軍手と靴がびしょびしょになり、すごく寒かったです。しかし、そのあとおごってもらったラーメンはすごくおいしかったです。

製作課の扱う仕事の範囲は広く、また1つ1つの仕事で漏れがないか、細かくチェックしなければならず、責任感の間われる部署でしたが、非常にやりがいがあると思いました。また撮影期間中、深夜0時を超えた撮影があったのですが、撤収作業が終わり、セットを離れる際、スタ

ップの1人が「明日も頑張ろうな！」と声をかけてくれたのは印象的でした。

一方で、言われたことをこなすだけで、自分から積極的に仕事を探すことができなかつたのは悔やまれます。担当の人に、仕事とバイトの違いは言われたこと以上のことをやるかやらないかだと言われました。

今回のインターンを通じて、映画の裏では多くの人の創意工夫、努力があるのだとこの肌で実感出来ました。非常に有意義な体験でした。楽しかったです。ありがとうございました。